G88図 SD04出土石製品実測図 ($S=1/2$)

縁端部の拡張が大きく頸部以下の内面にはケズリ調整が目立つようになる。G86-17の口縁部はほぼ直し草田2期と考えられ、G86-18～G86-22は口縁部が外反気味に開口しており、草田3期のものと思われる。

続いて鉢と思われるものを示した。G87-6～G87-8は頸部が屈曲し口縁端部が上下に拡張するものであり、G87-9は体部から口縁部にかけて器壁が内湾するものである。いずれも松本IV-2期のものと考えられる。なお、G87-7・G87-8は胎土や施文の特徴から同一個体と思われる。

次に高壺を取り上げた。G87-10～G87-14は凹線文による施文が目立ち、松本IV-2期頃のものと考えられる。G87-15は無文であり脚柱部に壺底部が剥離した痕跡が明確には残っていないため、台形土器である可能性も残る。時期については松本IV期の範疇に収まるものと思われる。

G87-16は分銅形土製品である。復元値の長さが17cm、幅16.5cmを測り、下古志遺跡から出土したものの中では最も大きいものである。表面の外縁およびくびれ部以外の側面には沈線と刻目を組み合わせた文様が施されるが、裏面はミガキ調整が施されるものの無文である。断面を観察すると裏面は平坦であるのに対して、表面は外縁より中央付近がやや厚みを増しているため凸面状を呈している。また、色調はぶい橙色であるが表面の文様内などに一部橙色の顔料の痕跡らしきものも認められるため、赤色顔料が塗布されていた可能性も残る。時期については判然としないが、他の出土遺物の中核期が松本IV-2であるため、同時期である可能性が高い。なお、約35m離れた地点であるF区B117Grから出土した小片F46-15と特徴が合致するため、同一個体であると思われる。

G88-1には石製品と思われるものを示している。細長い形態を呈しており、剥離面以外に人の手が加わった可能性のある痕跡は認められないが、何らかの使用目的で遺跡内に持ち込まれたものであろう。

SD04の性格については判然としないが、SD01と類似する点が多いため同様の性格を有していたと思われる。SD01との大きな相違点として出土遺物の時期差があげられる。すなわち、SD01の遺物は中期後葉までのものであるのに対して、SD04のものは中期後葉から後期までのものが出土している。SD01とSD04が築かれた時期にあまり差はないようであるが、SD04の方が長期にわたって使用されていたことがうかがえる。

まず最初に壺を示した。G85-1は広口壺であり、検出面直上、SD04の第2層、SK02の第9層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。これとG85-2～G85-4は胎土や施文の特徴が酷似していることから同一個体と考えられる。統いて口縁部あるいは頸部の破片を示したが、G85-5～G85-8は松本IV期、G85-9は草田2期頃のものと思われる。

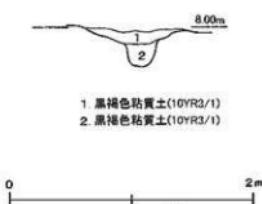
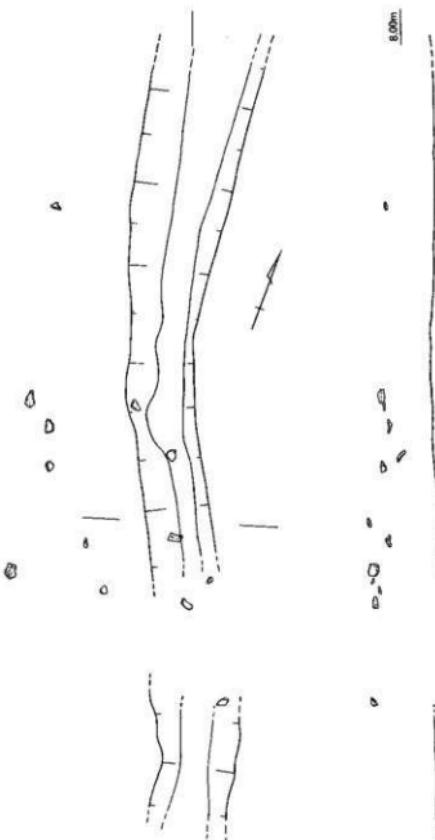
次に壺を取り上げた。G86-1～G86-8は松本IV-1期から松本IV-2期のものと思われ、口縁端部の拡張が小さく、かつ、内傾している。G86-9～G86-16は松本IV-2から草田1期のものものと思われ、口

SD26 (G89~G92図)

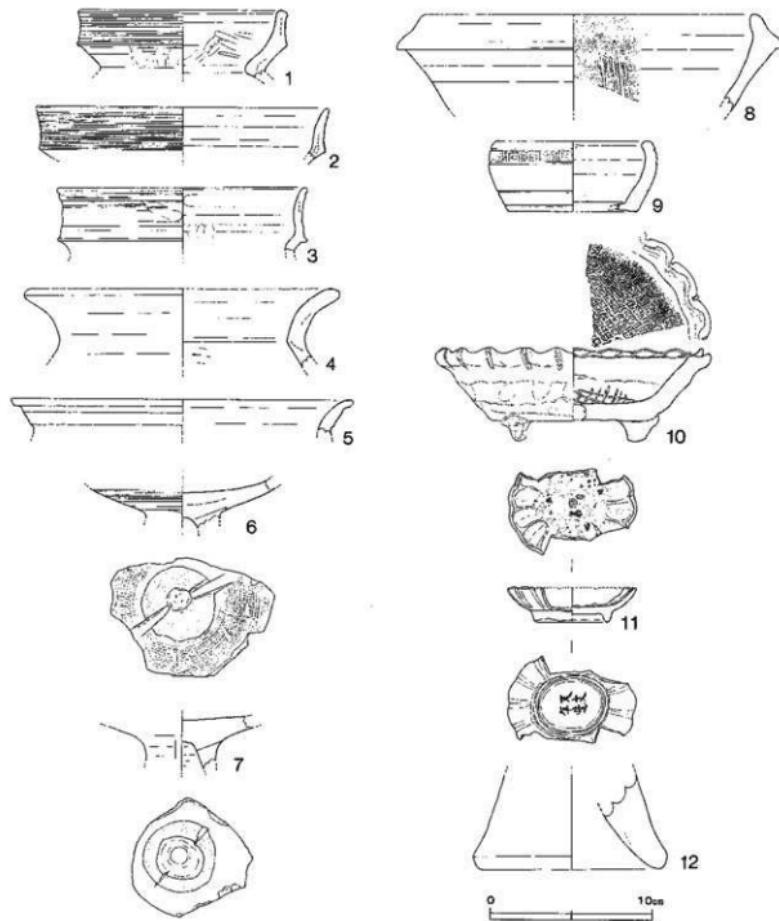
SD26はB143GrからC143Grにかけての標高8.00mの調査面で検出した溝状遺構である。C143Grで不明瞭になつてゐるため検出した長さは6.1mである。この範囲では若干蛇行しているものの概ねN-18°-W方向を指向している。検出規模は上幅50cm~88cm、下幅15cm~50cm、深さ22cm~32cmを測る。側壁の立ち上がりは底から標高8.87m付近までは急であるが、より上位では緩やかとなつてゐる。

覆土については2層確認できており、ここからビニール1袋分の出土遺物があった。内訳は弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器、石製品、鉄製品であり、土師器、須恵器、中世土師器の出土数が目立つ。これらのうち実測に堪えるものをG90-1~G92-1に示した。弥生時代後期から16世紀前半のものが認められるため、この遺構の時期は16世紀前半以降と考えられよう。

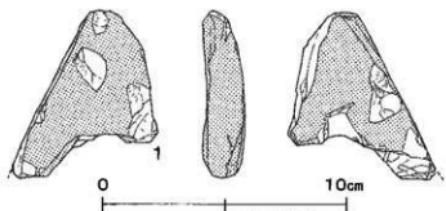
なお、平面的には遺構からずれるものの、第1層は遺構以外に広がつていたため、この層から出土したと判断できるものについてはSD26の出土遺物として扱つてゐる。



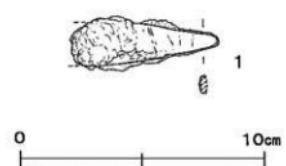
G89図 SD26実測図 (S=1/40)



G90図 SD26出土土器・陶磁器実測図 ($S=\frac{1}{2}$)



G91図 SD26出土磁石実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

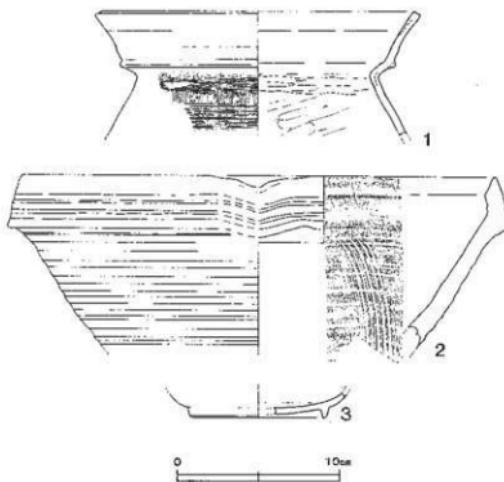
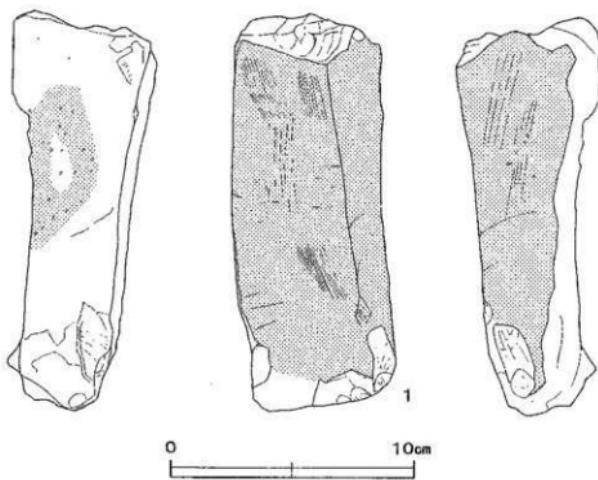


G92図 SD26出土鉄製品実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

SD32 (G93～G95図)

D147-B150ライン付近の標高7.59m～8.96mの調査面でSD32を検出した。SE10、SK25、SD34などと切り合い関係にある溝状遺構であるが、検出時にはいずれの遺構にも切られているように観察できた。N-81°-W方向にはほぼ直線的に延びており、調査区内では長さ18.5mにわたり検出している。検出規模は上幅140cm～190cm、下幅40cm～85cm、深さ60cm～93cmを測る。両側壁は34°前後でほぼ直線的に立ち上がっていっているた

G93図 SD32実測図 ($S=1/20 \cdot 1/40$)

G94図 SD32出土土師器・陶磁器実測図 ($S=1/2$)G95図 SD32出土砥石実測図 ($S=1/2$)

が認められた。長さ15.5mにわたって検出しており、この範囲では軸方向がN-62°-Eを指向している。検出規模は上幅38cm~150cm、下幅20cm前後、深さ40cm~66cmを測り、上幅についてはC146Gr付近で最大値を記録し、その個所では両側壁には段も認められる。底の標高については、遺構の南西端付近で

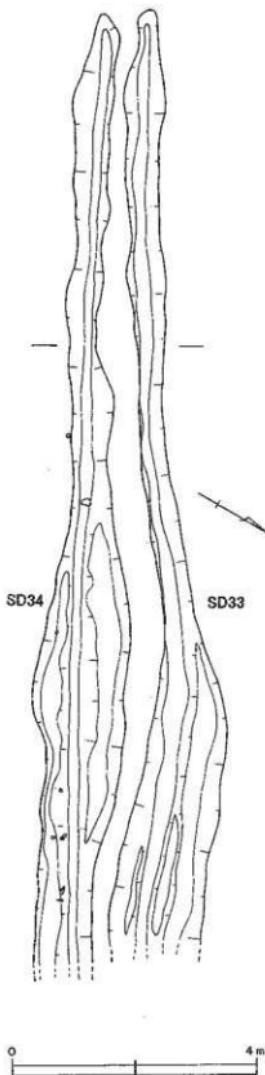
め、断面形は揺るやかな「V」字形を呈する。また、底は標高6.90m~7.07mの範囲で僅かに変化するものの勾配があるとは言えない。

覆土については13層に観察でき、ここから少量の出土遺物があった。内訳は弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器、石製品であり、図化に堪えるものを示した。G94-1は草田6~7期の壺である。口縁端部に面を有しており、凹線状の凹みも認められる。また、頸部下位の外面にはヘラ焼きによる文様が部分的に施されているようである。G94-2は瀬戸美濃系の描鉢であり16世紀前半のものと考えられる。G94-3は白磁の皿であり16世紀前後のものと思われる。G95-

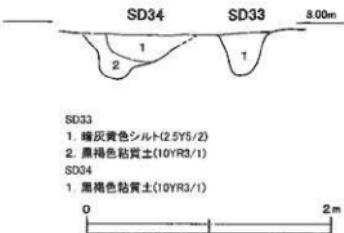
1には唯一出土した石製品を示した。方柱状の砥石であり3面に研ぎ面を残している。

これら出土遺物からSD32は16世紀以降の遺構である可能性が高い。
SD34 (G96~G99図)

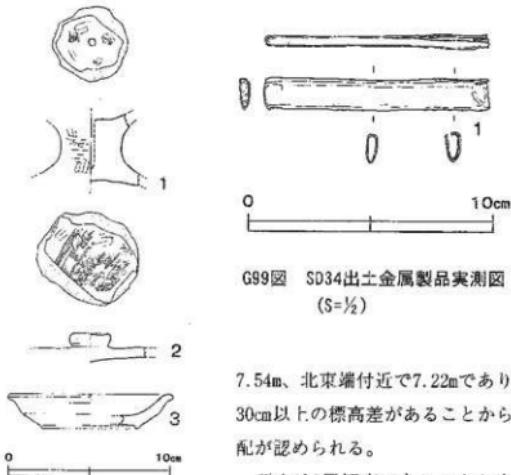
C144GrからC147Grの標高7.90mの調査面においてSD34を検出した。SD32と切り合い関係にあり平面的には判然としなかったが、断面を観察したところSD34がSD32を切っている様子



G96図 SD33・SD34実測図
(S=1/60)



G97図 SD33・SD34土層図 (S=1/60)



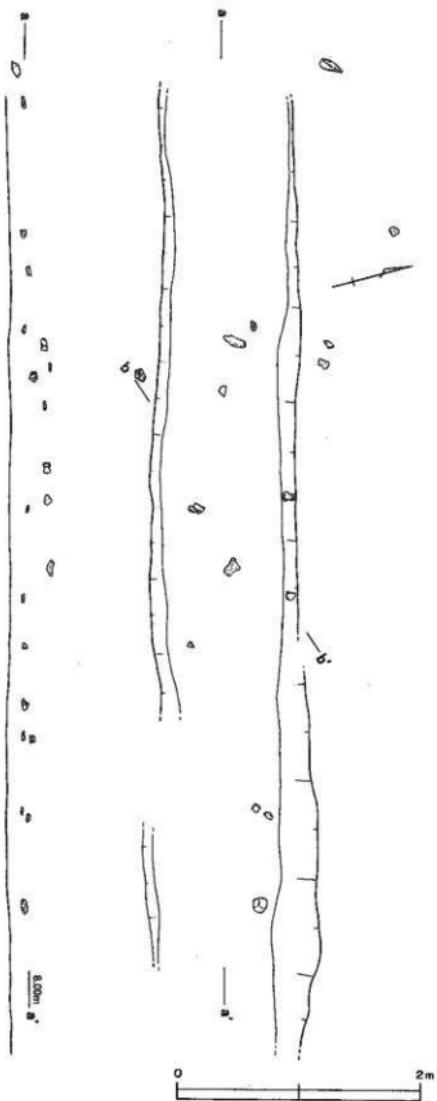
G98図 SD34出土土器・陶磁器実測図 (S=1/60)

7.54m、北東端付近で7.22mであり、30cm以上の標高差があることから勾配が認められる。

覆土は2層観察できここから少量の出土遺物があった。内訳は土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器、金属製品であり実測可能なものを示した。

G98-1は土師器あるいは瓦質土器の蓋と思われるが時期は判然としない。G98-2は須恵器の蓋であり9世紀頃の所産と思われる。G98-3は美濃焼の皿で16世紀の所産と思われる。G99-1は唯一出土した金属製品を掲載した。両端部が残存しているためほぼ完形をなしていると考えられるが用途は不明である。

これらの出土遺物からSD34の時期は16世紀以降と考えられる。また、遺構の性格は不明であるが隣接して検出したSD33と類似点が多く、同様の性格を有していたものと思われる。なお、SD33については後述する。



SD35 (G100～G102図)

C144-B145ライン付近の調査面でSD29によって切られた状態でSD35を検出した。調査面の標高は7.90m前後であるが、セクションを観察すると、より上位の標高8.14mから掘り込まれていることが確認できた。

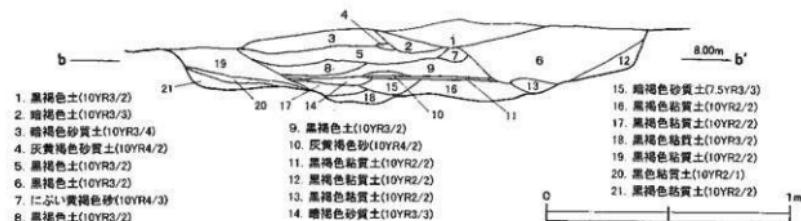
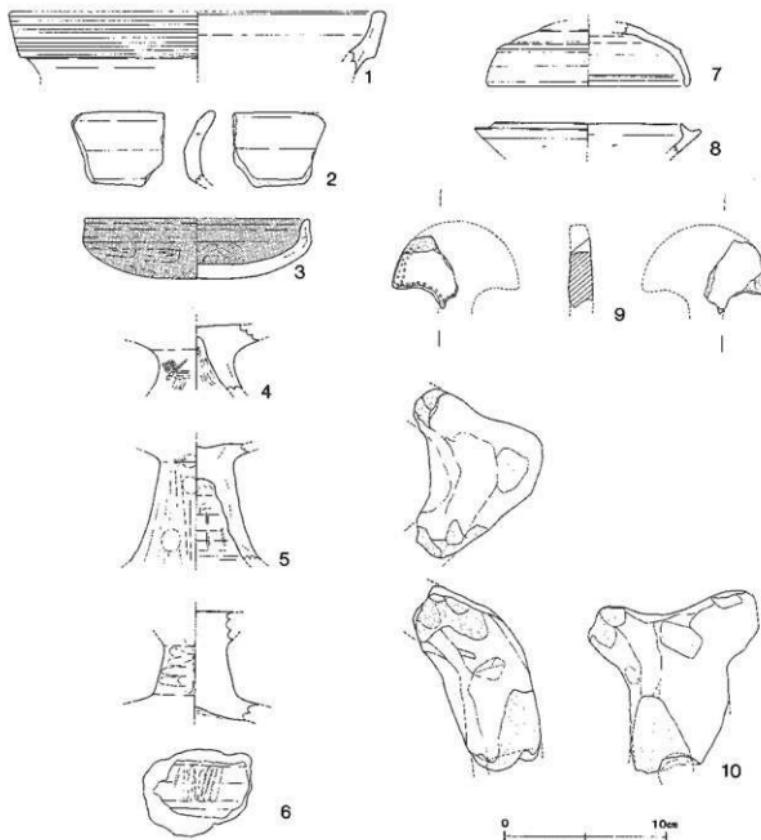
C143Grでは不明瞭になり続ぎが観察できなかったため、検出した長さは7.5mに過ぎない。この範囲ではほぼ直線的に延びており軸方向はN-75°-Wを指向している。検出規模は上幅120cm前後、下幅100cm前後を測る。また、断面形は台形を呈しており、底の標高は7.83m～7.88mで勾配は認められない。

覆土はやや複雑に重なり、確認できた土層は21層に及ぶ。一部にラミナ構造が認められることから水が流れていた可能性が高い。掘り返しが繰り返されて管理されたことが想定されるため、用排水溝として用いられていたものと思われる。

出土遺物については覆土中からビニール袋1袋分の土器片が出土している。内訳は弥生土器、土師器、須恵器であり図化に堪えるものだけを掲載した。特筆すべきものとしてG102-9に示す弥生時代の分銅形土製品が出上している。表面は刺突文によって外縁が飾られるが裏面は無文である。また、断面に目を移すと、裏面は平らであるのに対して表面は中央が高まる凸面状を呈している。

このように弥生時代の遺物が出土するものの、他の土器片の時期は6世紀から8世紀頃のものと思われるため、遺構の時期は8世紀頃と考えられよう。

G100図 SD35実測図 (S=%)

G101図 SD35土層図 ($S=1/20$)G102図 SD35出土土器・土製品実測図 ($S=1/3$)

その他の主要溝状遺構

SD03 (G103・G115図)

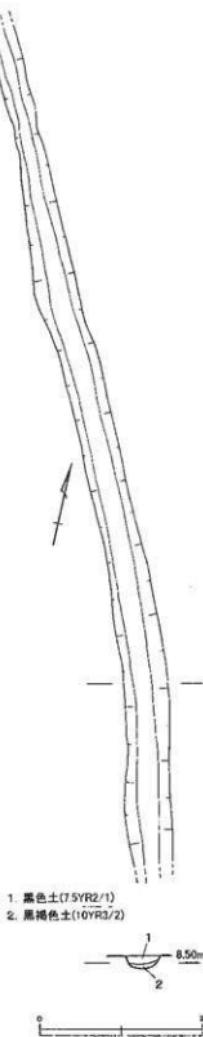
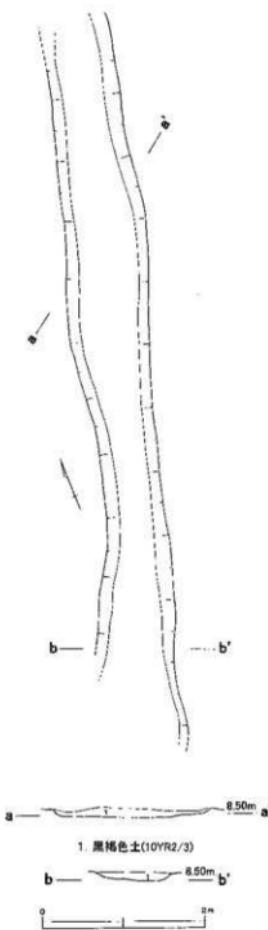
SD03はB125GrからD125Grに至る標高8.60mの調査面において、SD02とSD07を切った状態で検出した溝状遺構である。長さ10.5mにわたり検出しており、この範囲ではやや湾曲するものの概ね

N-25°-W方向に延びている。
検出規模は上幅28cm～57cm、
下幅31cm～27cmを測り、
深さは15cm程度と浅い。

覆土は2層確認できここ
から僅かに弥生上器、上師
器、須恵器、土製品が出土
している。これらのうち実
測に堪えるものをG115-1に
示した。土製支脚の破片で
あるが時期は不明である。

SD07 (G104・G115図)

SD07はC124GrからD125Gr
に至る標高8.60mの調査面
において検出した溝状遺構
である。SD03とSD04によっ
て切られた状態で確認でき
たが、SD04との切り合いに
ついては不明瞭であった。
SD04を越えたSD07の延長箇
所では遺構の続きが確認で
きず、検出した長さは7.1m
にとどまっている。この範
囲ではSD07はほぼ直線的に
延びており軸はN-16°-Eを指
向している。検出規模は上
幅70cm～100cm、下幅42cm
～74cm、深さ12cmを測る。
側壁の立ち上がりは比較的
緩やかで、底は標高8.48m
付近で概ね平坦である。

G103図 SD03実測図 ($S=1/60$)G104図 SD07実測図 ($S=1/60$)

1層のみ観察された覆土からは僅かに弥生土器の小片が出土しており、実測可能なものをG115-2・G115-3に示した。両者とも弥生時代中期後葉のものであり、遺構の時期を示すと考えられる。

SD08・SD09 (G105・G115図)

B131GrとC131Grの標高8.36mの調査面においてSD08とSD09を検出した。両者とも遺構の性格については不明であるが、検出状況から同一遺構である可能性もある。しかし、何らかの関連はあるものの異なる遺構である可能性もあるため個別に報告する。

SD08は「L」字状に折れ曲がる溝状遺構である。検出した長さは延べ11.6mであり、軸方向はN-87°-WとN-5°-Wである。検出規模は上幅57cm~110cm、下幅30cm~50cm、深さ24cm程度を測る。

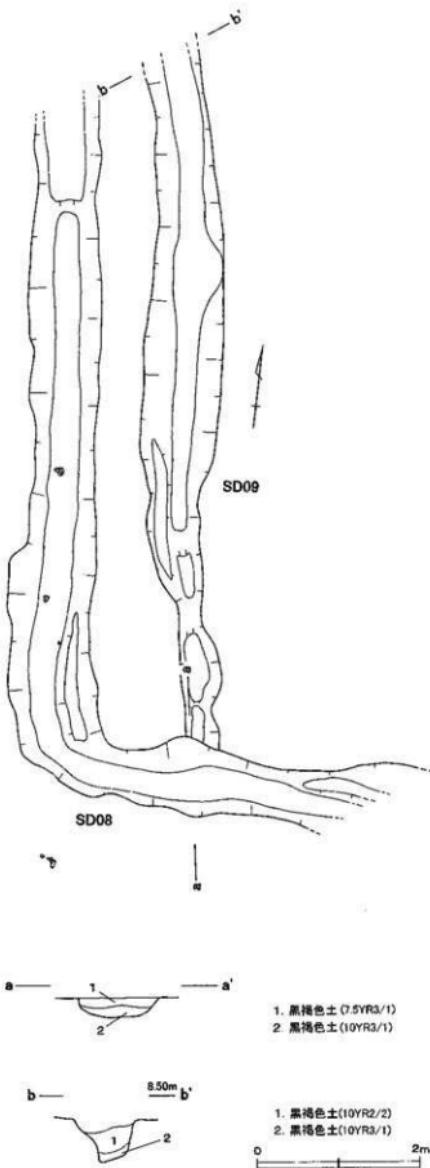
覆土は2層確認できここから少量の土器片などが出土しているため、固化可能なものをG115-4に示した。近世の陶磁器であるため、この遺構の時期は近世以降と考えられる。

SD09はSD08以北で検出した溝状遺構でありSD08以南で遺構の続きは認められなかつた。長さ8.5mにわたって検出しており、若干蛇行するものの大筋的にはN-8°-W方向に延びている。検出規模は上幅28cm~96cm、下幅14cm~60cmを測り、底の標高は7.86m付近で凹凸を有している。

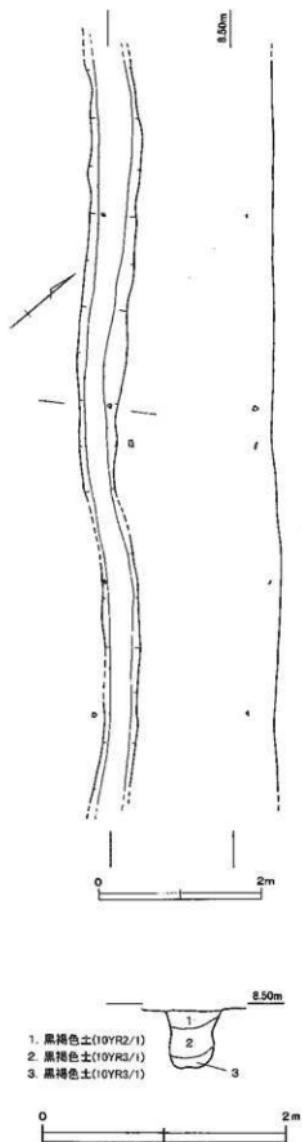
覆土は2層に分層可能でありここから少量の土器片が出土した。内訳は上師器、須恵器、中世土師器であり実測可能なものをG115-5に示した。中世土師器の坏でありこの遺構の時期を示す可能性がある。

SD10 (G106・G115図)

SD10はB128GrからC128Grにかけての標高8.46mの調査面で検出した。長さ9.1mにわ



G105図 SD08・SD09実測図 (S=1/60)



G106図 SD10実測図 (S=1/50・1/40)

たって検出しており、この範囲ではやや蛇行するものの概観するとN-50°-W方向に延びている。検出規模は上幅38cm～64cm、下幅21cm～41cm、深さ47cm程度を測る。側壁の立ち上がりは底から上端に至るまで垂直に近いため断面形は「U」字形を呈している。底の標高についてはBライン付近で7.99m、Dライン付近で7.90mと若干の差がみられるため勾配が認められる。

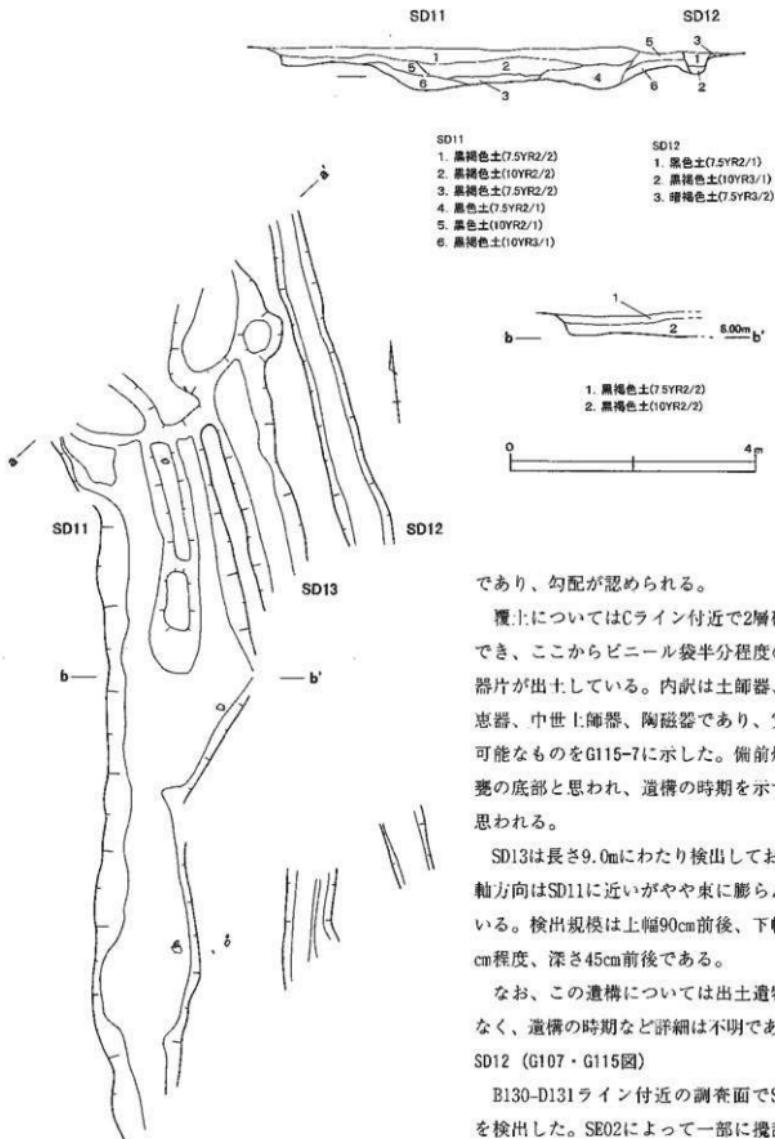
覆土は3層に分層可能でありここからビニール袋半分程度の土器片が出土している。内訳は弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器であり弥生土器が占める割合が最も高い。これら出土遺物のうち実測に堪えるものをG115-6に示した。弥生時代中期後葉の高坏であり、他の弥生土器片も同時期頃のものと思われる。このように弥生土器片が出土するものの、他に中世土師器や陶磁器の破片も認められることから、SD10の時期は中世以降と考えられる。

なお、このSD10はSB03やSB04と切り合い関係にある。検出時にSB03によって切られているのは明確であったが、SB04と切り合いは判然としなかった。しかし、出土遺物から推定してSD10はSB04を切っていた可能性が高いと言える。また、SD02と形状がよく似ていたため同一遺構であることも考えられたが、出土遺物の時期差からその可能性は低い。

SD11・SD13 (G107・G115図)

SD11とSD13は129Grから130Grにかけての標高8.42m付近の調査面で検出した。両者ともSE02によって切られており、SD11についてはSD10を切っていた。この2条の溝状遺構は調査区のDライン際では重なるが、切り合い関係が判然としない状態であった。よって、同一遺構であるのか、異なる遺構であるのかは不明であるため、以下、個別に報告する。

SD11は長さ12.0mにわたり検出しており、軸方向についてはほぼN-4°-Eを指向している。検出規模は上幅105cm～227cm、下幅45cm～200cmを測り、CラインからDライン間で上幅、下幅とも最大値を記録する。また、底の標高については、Cライン付近で8.00m、Dライン付近で7.80m



であり、勾配が認められる。

覆土についてはCライン付近で2層確認でき、ここからビニール袋半分程度の上器片が出土している。内訳は土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器であり、実測可能なものをG115-7に示した。備前焼の壺の底部と思われ、遺構の時期を示すと思われる。

SD13は長さ9.0mにわたり検出しており、軸方向はSD11に近いがやや東に膨らんでいる。検出規模は上幅90cm前後、下幅45cm程度、深さ45cm前後である。

なお、この遺構については出土遺物がなく、遺構の時期など詳細は不明である。
SD12 (G107・G115図)

B130-D131ライン付近の調査面でSD12を検出した。SE02によって一部に擾乱を受けているが、調査区BラインからDラインに至る間の長さ11.0mにわたり検出し

G107図 SD11～SD13実測図 (S=%)

ている。この範囲で軸はやや東に膨らむが、概観するとN-5°-Wを指向している。検出規模は上幅60cm前後、下幅40cm前後を測る。調査区Dラインセクションを観察すると、この遺構は標高8.38mから落ち込んでいる様子が確認できた。また、この箇所では底の標高が8.05mであった。

覆土は2層確認でき、ここから僅かに弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土している。これらのうち実測可能なものをG115-8・G115-9に示した。前者は弥生時代後期の壺であり、後者は古墳時代終末期頃の須恵器の直口壺と思われる。これらの出土遺物からこの遺構の時期は古墳時代終末以降と推定される。

SD16 (G108・G115図)

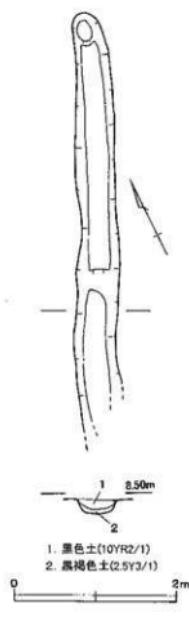
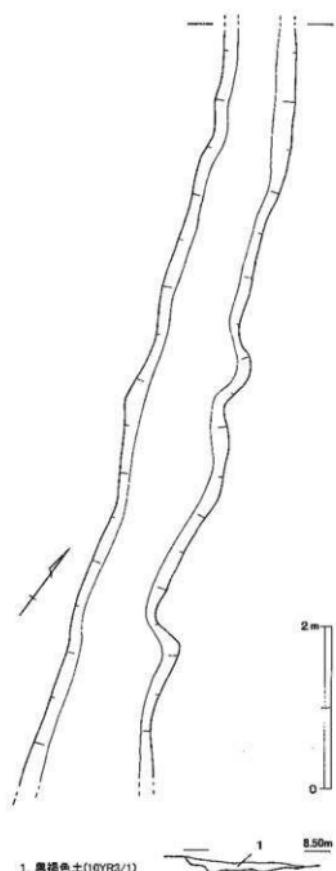
SD16はB138-D138ライン付近の標高8.42mの調査面において検出した。調査区内で長さ9.5mにわたり確認しており、この範囲ではやや蛇行するものと概観するとN-24°-W方向に伸びている。検出規模は上幅90cm～150cm、下幅48cm～117cmを測り、深さは20cm程度で比較的浅い。この遺構の底からはSK11やSK12など数基の土坑が溝に沿う状態で検出されている。これらはSD16

と一連の遺構である可能性もあるが、セクションで切り合いを観察するといずれの土坑もSD16によって切られていたため、別の遺構として取り扱っている。なお、SK11とSK12については後述する。

覆土については1層のみ確認できた。ここからは中世土師器を中心とする土器片が少量出土しており実測可能なものをG115-10に示した。中世土師器の壺であり、詳細な時期は判然としないが遺構の時期を示すものと考えられる。よって、SD16は中世以降の遺構であろう。

SD17 (G109・G115図)

B139GrからB140Grにかけての標高8.43mの調査面に



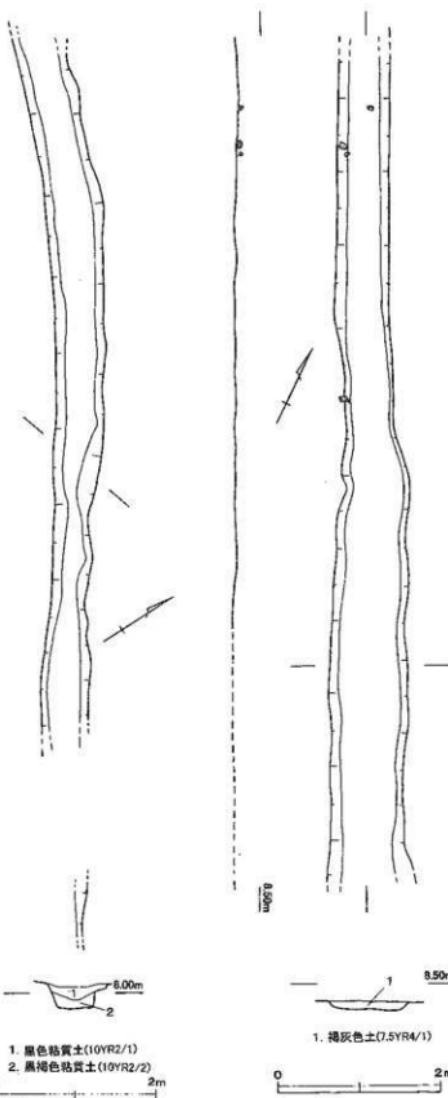
においてSD17を検出した。B140Grでは試掘坑によって攪乱を受けており遺構の続きが不明瞭であったため、検出できた長さは5.0mにとどまった。この範囲ではSD17はN-25°-Eを指向しており、検出規模は上幅50cm前後、下幅30cm程度、深さ20程度であった。

覆土は2層確認でき、ここからビニール袋半分程度の土器片が出土している。内訳は土師器、須恵器であり土師器が大半を占めている。これら出土遺物のうち実測可能なものをG115-11に示した。人谷5期頃の須恵器蓋坏の坏身と考えられ、遺構の時期を示す可能性がある。

SD28 (G110・G115図)

C142GrからB143Grにかけての標高8.12mの調査面においてSD28を検出した。軸方向はC142Grでやや西に振るが、その他の箇所ではN-56°-Wを指向している。一部を他の遺構に切られているが、調査区のBラインからDラインに至るまでの間で確認でき、検出した長さは10.8mに及ぶ。また、検出規模は上幅40cm~71cm、下幅13cm~47cm、深さ30cm前後を測る。

覆土は2層確認でき、ここから弥生土器片が数点出土しているため、実測可能なものをG115-12に示した。弥生時代後期後半の窓であり遺構の時期を示す可能性はあるが、出土遺物の絶対数が少ないため、断言はできない。



SD29 (G111・G115図)

B145-D145ライン付近の標高8.28mの調査面でSD29を検出した。調査区のBラインからDラインに至る長さ10.1mにわたり検出しており、この範囲では直線的にN-25°-W方向に延びている。検出規模は上幅63cm~97cm、下幅37cm~76cmを測り、深さは10cmと比較的浅い。底の標高についてはBライン付近、Dライン付近とともに8.20mであることから勾配は認められない。

覆土は1層のみ観察でき、ここから少量の土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器などの小片が出土している。これらのうち実測に堪えるものをG115-13に示した。土製支脚の破片であり、破片の上部には背面から腹面に向かい貫通しない孔が穿たれていた痕跡が観察できる。SD29の出土遺物から遺構の時期を推定するのは困難であるが、遺構検出時にはSD33、SD34、SD35を切っていたことから、これらより新しい遺構であることは明らかである。

SD30 (G112・G115図)

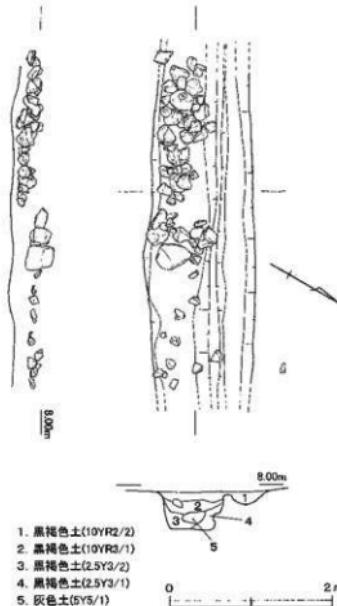
C150-C151ライン付近の標高7.91mの地山面でSD30を検出した。この遺構は調査区壁から不明瞭になるまでの間の長さ3.9mの検出にとどまっているが、この範囲ではN-60°-E方向に直線的に延びている。この遺構は浅い溝と深い溝によって構成されており、検出規模は前者が上幅30cm~48cm、下幅15cm~

30cm、深さ15cm程度、後者が上幅66cm~81cm、下幅40cm~67cm、深さ44cm程度であった。浅い溝からは出土遺物はほとんどなかったが、深い溝からは5cm~40cm大の自然礫が多数出土している。しかし、これがどのような用途で持ち込まれたものかは不明である。

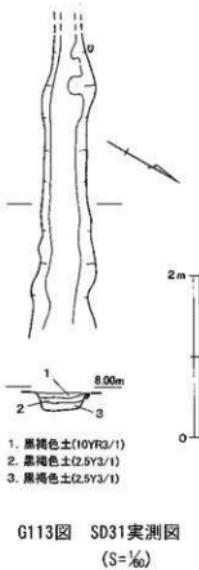
覆土は全体で5層確認されており、ここからごく僅かに土器などの破片が出土している。これらのうち実測に堪えるものをG115-14に示した。備前焼の壺と思われるが時期は判然としない。

SD31 (G113・G115図)

C150Grの標高7.92mの調査面でSD31を検出した。この遺構も調査区壁から不明瞭になるまでの間の3.7m程度というごく限られた検出にとどまっている。



G112図 SD30実測図 (S=1/60)



G113図 SD31実測図 (S=1/60)

るが、この範囲ではほぼ直線的に延びており、軸はN-62°-Eを指向している。また、検出規模については上幅35cm~74cm、下幅14cm~40cm、深さ21cm程度を測り、底の標高7.71m付近であった。

覆土は3層に分層可能で、ここから僅かに中世土師器と陶磁器の破片が出土している。これらのうち実測可能なものをG115-15に示した。中世土師器の壺の底部片であり遺構の時期を示す可能性があるが、製作時期は判然としない。

なお、SD31はSD30と軸方向が似ているため何らかの関連をもつ可能性がある。

SD33 (G96・G115図)

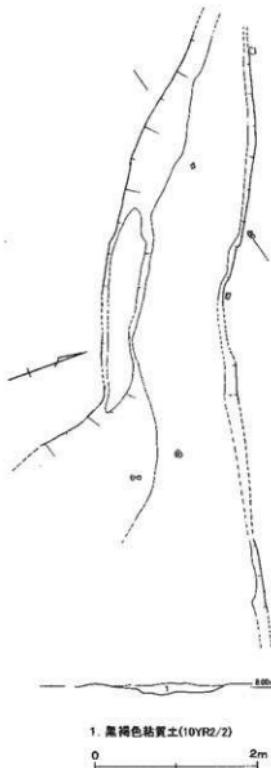
SD33はC144GrからC147Grの標高7.90mの調査面においてSD32を切った状態で検出した。SD34と並んだ状態で検出しており、規模や形状が似ていることから、同一あるいは関連遺構と考えられる。長さ15.5mにわたって検出しており、この範囲ではC146Grでやや湾曲するが大局的にはN-60°-E方向に軸を有している。検出規模は上幅40cm~150cm、下幅25cm前後、深さ40cm前後を測り、底の標高は遺構の北東端に向かうに連れて若干低くなっている。

覆土は1層のみ観察でき、ここから須恵器1点とG115-16に示す中世土師器が出土している。出土遺物が少ないとめ遺構の時期は判然としないが、SD34と同時期、つまり16世紀以降の遺構である可能性が高い。

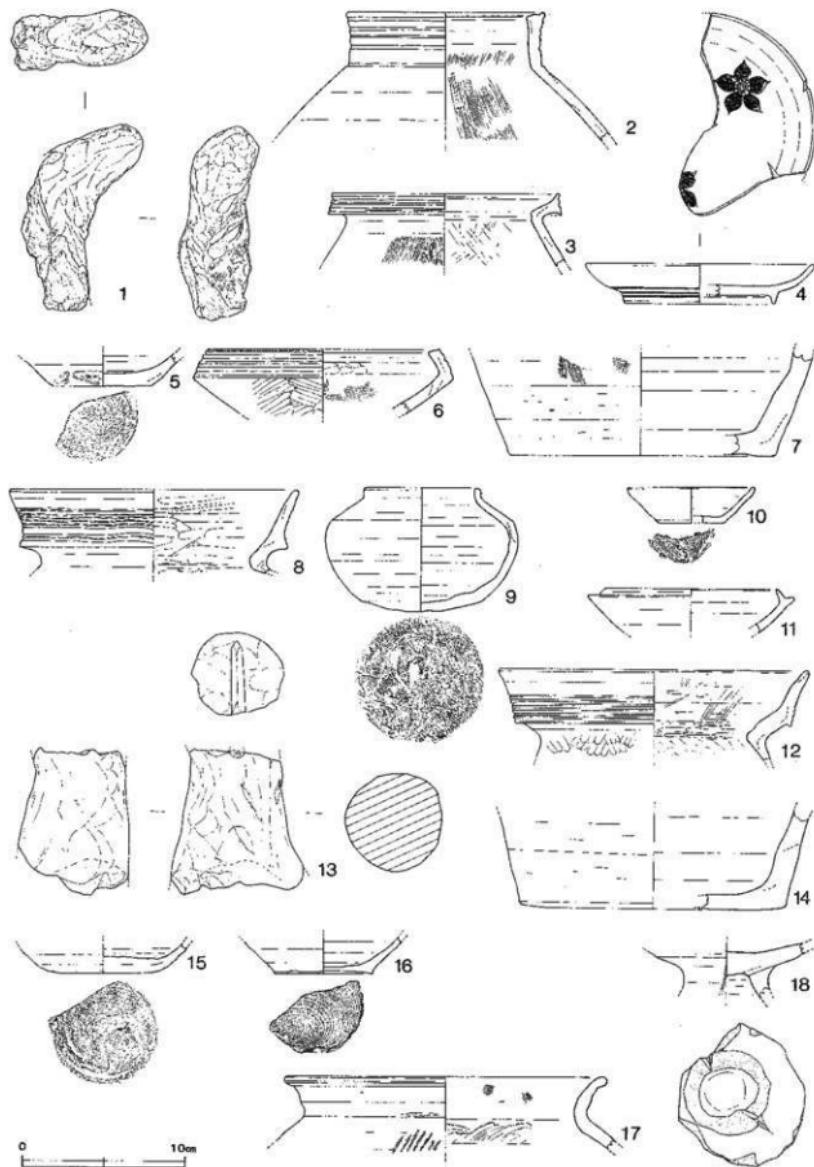
SD37 (G114・G115図)

B143GrからB144Grにかけての標高8.04mの調査面において、他の遺構に切られた状態のSD37を検出した。検出した長さは調査区BラインからCラインに至る間の6.3mであり、この範囲ではやや蛇行するが、大局的にはN-65°-W方向に延びている。検出規模は上幅70cm~167cm、下幅41cm~112cm、深さ13cm程度を測るが、Bライン付近では上幅、下幅ともさらに大きく広がっている。

覆土は1層のみ確認でき、ここから少量の上器片が出土している。内訳は土師器、須恵器であり、須恵器の出土が比較的目立つ。これら出土遺物のうち実測可能なものをG115-17・G115-18に示した。両者とも須恵器であり、前者は壺の口縁部、後者は高壺の壺部から脚部にかけての破片である。後者は2方向透しを有していたと考えられ、切り込み状の痕跡が認められる。この高壺は大谷5期頃の所産と考えられ、遺構の時期を示唆する。



G114図 SD37実測図 (S=1%)



G115図 その他の主要溝状遺構出土土器等実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

杭列

杭例1 (G116・G117図)

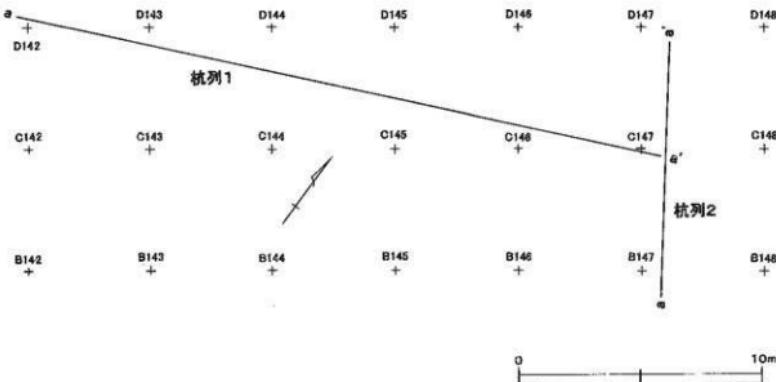
D142-D147ライン付近において杭例1を検出した。N-66°-E方向に延びており、調査区内では長さ27mにわたり検出したが、一端はDラインと交叉しているため調査区外にさらに続くと思われる。この杭例は、東寄り1/3の間と西寄り2/3の間で杭の検出状況に違いがみられた。すなわち、東寄り1/3の間では杭が平面的に70cm前後の間隔で一列に配されているのに対し、西寄り2/3の間では杭がやや密に検出され、平面での配置も直線的ではない。また、標高が8.50mより上位で検出されるものと、8.40m以下で検出されるものが認められ、前者は後者に比べ杭の長さが長い。さらに、この長い杭にのみ着目すると50cm前後の間隔で配されている箇所も認められる。これらの検出状況から、西寄り2/3の間では杭が打ち直されたものと推定できる。つまり、標高8.40m以下で検出される杭が最初に設置されたもので、これが朽ちたために標高8.50m以上で検出される杭を再度設置したものと思われる。

杭の加工については、直径3cm～10cm程度の木材の一端に数面の削りを加え先端を成形するという簡単なものであり、木材の表面の大部分は自然面である。

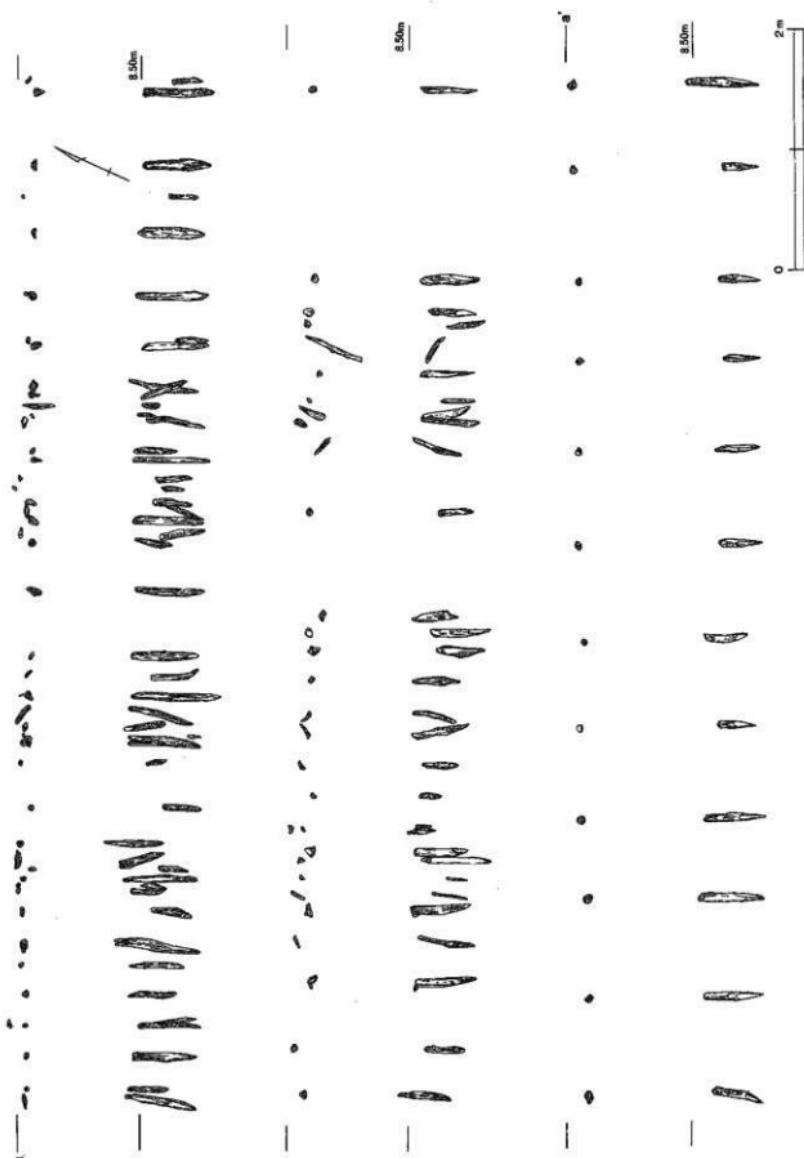
この杭例1の時期については標高8.00m付近の地山面よりも高い標高で確認されていることから近世以降のものと考えられる。また、性格については水田に関係するものではないかと思われる。

杭例2 (G116・G118図)

B147-B147ライン付近で杭例2を検出した。N-35°-W方向に延びており、調査区内では長さ10.5mにわたり検出しているが、両端がBライン及びDラインと交叉しているため、調査区外にさらに延びていると考えられる。杭は長さ80cm程度の比較的長くしっかりとした木材が用いられており、加工は端部に数面の削りを加えて先端を成形する簡単なものである。設置の間隔についてはややばらつきがあり、密な箇所と疎い箇所が認められ均一ではない。



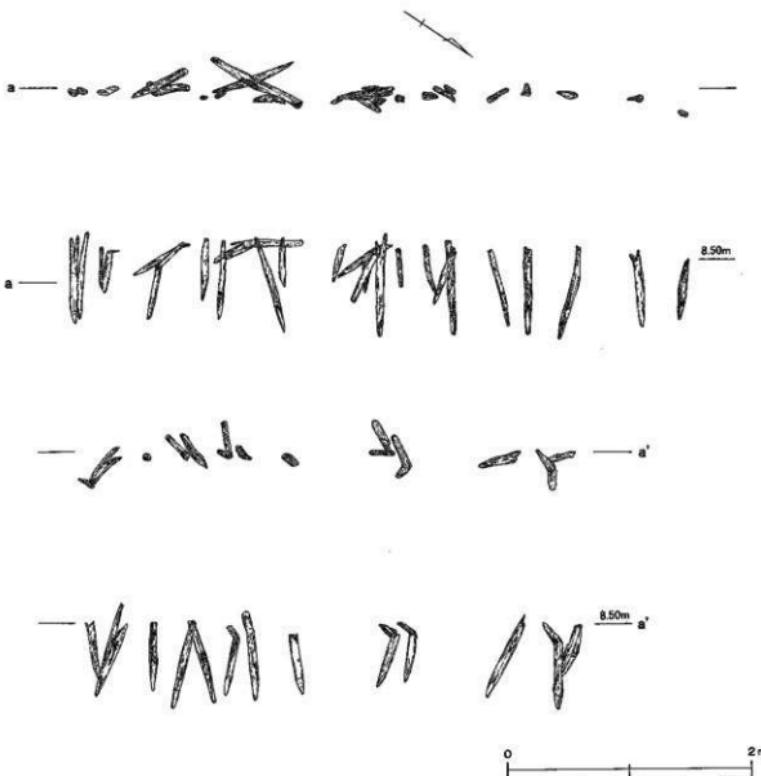
G116図 杭例1・杭例2配置図 (S=1/200)



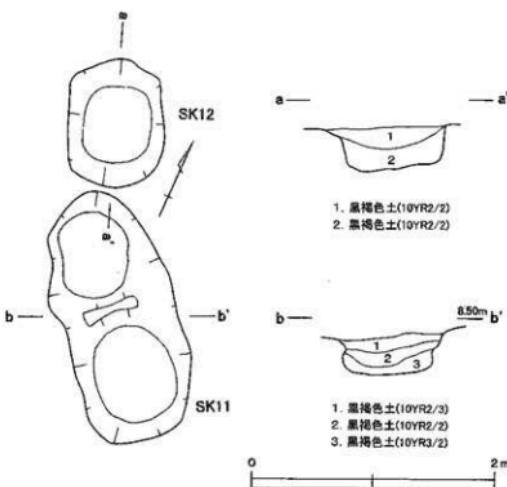
G117図 桁例1実測図 ($S=1\%$)

杭例2より北東の148Grの149Grでは幅10mにわたり地山面が8.00m以下に落ち込んでいた。また、この落ち込んだ箇所に堆積している土層の上面を精査した際、牛の足跡と思われる痕跡が多数観察できた。この箇所はかつての水田跡と考えられ、杭例2は水田範囲を区画するために築かれた可能性が高い。

なお、この杭例2の時期については、標高8.10mの地山面より標高8.50m付近で先端を検出しているため、近世以降のものと考えられる。



G118図 杭例2実測図 ($S=1/40$)



G119図 SK11・SK12実測図 (S=1%)

一方、SK12はN-21°-W方向に長い丸味を帯びた方形の平面形を呈している。検出規模は長さ106cm、幅78cm、深さ37cmを測る。覆土は2層確認でき、ここから僅かに土器片が出土しており、実測に堪えるものをG123-2に示した。弥生時代後期の窓であるが、他の破片に中世土師器が認められるため、遺構の時期を示す資料ではない。

SK14 (G120・G124図)

B132GrのBライン際標高8.40mの調査面でSK14を検出した。他の遺構によって攪乱を受けているため平面形や規模は不明であるが、深さは30cm程度を測る。

この遺構の覆土からは少量の土師器片が出土したほか、G124-1に示す鉄製品が出土している。曲刀鎌の根本部分と思われるが定かではない。

なお、遺構の時期や性格については不明である。

SK16 (G121・G123図)

C150Grの標高7.95m地山面でSK16を検出した。平面形はN-61°-E方向に長軸をとる長細いいびつな形状を呈しており、検出規模は長さ381cm、幅34cm～81cm、深さ4cm～13cmを測る。

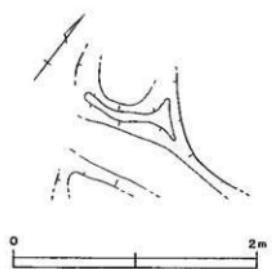
覆土は3層観察でき、ここから僅かに土師器片が出土している。これらのうち実測に堪えるものをG123-3に示した。高窓の窓部から脚柱部にかけての破片であり、脚柱部の内面以外には赤色塗装が施されている。この土器の時期は判然としないが、遺構の時期を示す可能性はある。

その他の主要遺構

SK11・SK12 (G119・G123図)

SD16を完掘した際、底から5基の土坑がSD16に沿う状態で確認できた。これらのうち遺物が出土したSK11とSK12について取り上げたい。

SK11はN-40°-W方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径260cm、短径91cm、深さ35cmを測る土坑である。覆土は3層に分層可能であり、ここから少量の中世土師器片が出土している。これらのうち実測可能なものをG123-1に示した。12世紀後半頃の窓と思われ遺構の時期を示すと考えられる。

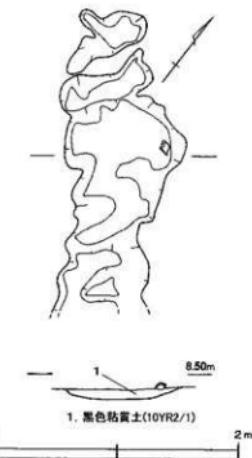
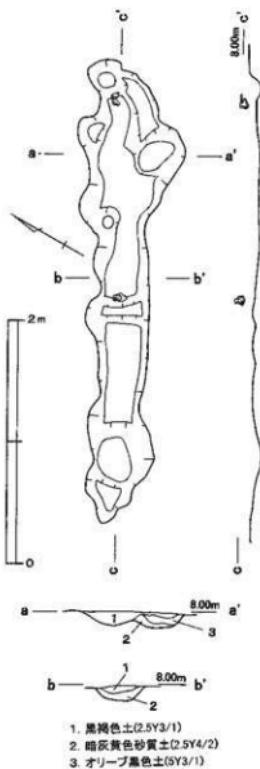


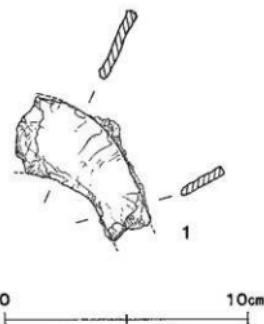
G120図 SK14実測図 (S=1%)

SX04 (G122・G123図)

B141GrのBライン際標高8.40mの地山面でSX04を検出した。N-35°-W方向に長軸を有するいびつな平面形を呈している。遺構の一部は調査区外に及んでいるが、検出規模は長さ244cm以上、幅51cm~100cmを測り、深さは8cmと浅い。

覆土は1層のみ観察でき、ここから数片の土師器片が出士している。これらのうち実測可能なものをG123-4に示した。土製支脚の一部であり、割れ口には背面から中心部に至る穿孔痕が認められる。この遺物の時期は判然としないが、遺構の時期を示す資料であろう。

G122図 SX04実測図 ($S=1/40$)G121図 SK16実測図 ($S=1/40$)G123図 その他主要遺構出土土器実測図 ($S=1/5$)



G124図 SK14出土鉄製品実測図 (S=1/2)

G区遺構外の出土遺物

今回の調査でG区の遺構外からはコンテナ3箱分程度の出土遺物があった。内訳は弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器、石製品である。半分以上を土師器が占め、続いて弥生土器、中世土師器が多く、須恵器、陶磁器は少量であり、石製品については1点のみの出土であった。

弥生土器 (G125・G126図)

遺構外から出土した弥生土器は、中期後葉から終末期のものが認められた。最も多く出土するのは松本IV-2期のものであり、その他は少量の出土にとどまっている。また、器種については壺、甕、高坏、瓶が認められるが、甕の出土量が大半を占めている。なお、図示にあたっては割愛したものもある。

最初に壺を示した。G125-1は装飾壺、G125-2は直口壺、G125-3は短頸壺と思われる。G125-4については壺の口縁部として扱っているが、高坏の脚部である可能性も残る。また、G125-5は広口壺の胴部上半片と思われる。これは中期後葉のものであるが、その他はいずれも後期の範疇に収まると考えられる。

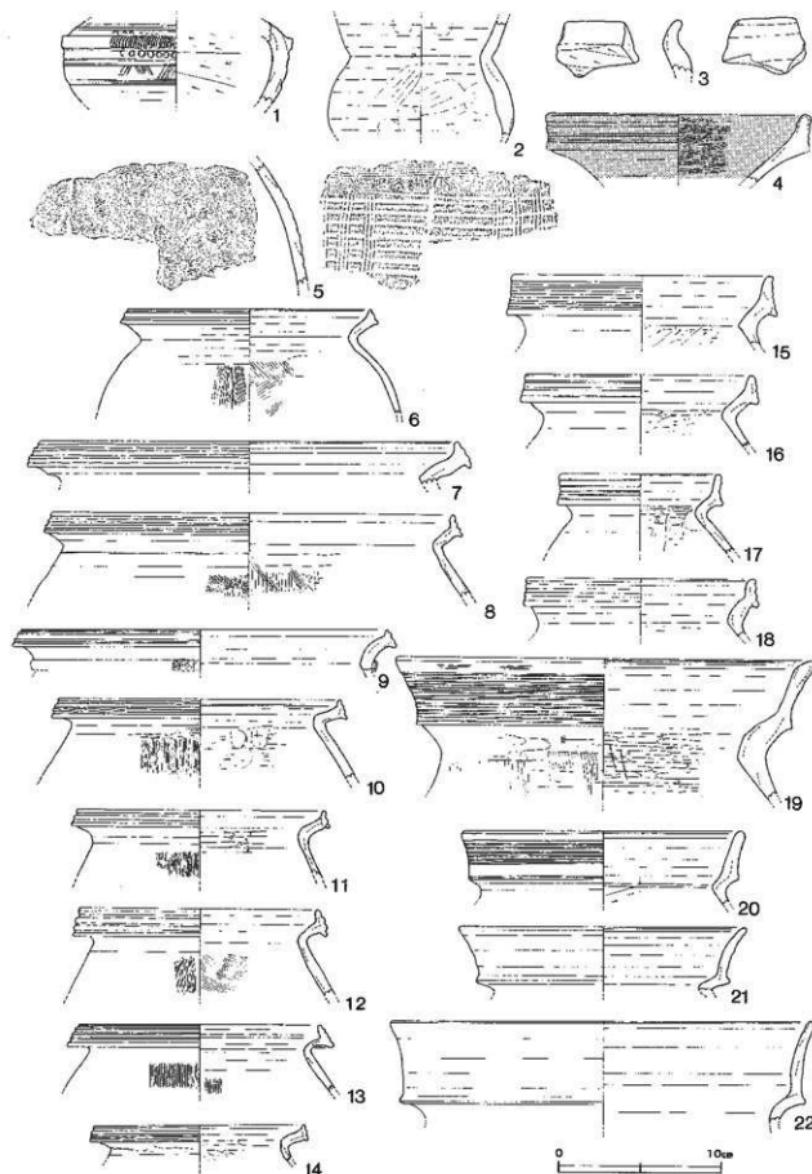
続いて甕を示した。G125-6～G125-14はいずれも口縁端部が内傾して上下に拡張し、端面に複数条の凹線文を施すものであり、中期後葉のものと考えられる。さらに、G125-6以外は松本IV-2期に併行すると考えられる。G125-15～G125-20には後期のものを示した。口縁部外側に多条の凹線文または平行沈線を巡らせ、頸部以下の内面にはケズリ調整が施されている。G125-21・G125-22には終末期のものを取り上げた。いずれも草田6期頃のものであろう。

G126-1～G126-5には底部片を示した。壺または甕のものと思われ、いずれも平底である。時期は判然としないが中期後葉のものと推定される。G126-6は高坏である。長い脚柱部を有しており、外側には多条の凹線文が施されており、塙町系のものであると思われる。G126-7は注口土器の注口部であり、終末期頃のものと思われる。G126-8・G126-9は山陰型瓶形土器の破片と考えられるが、小片であり詳細は不明である。

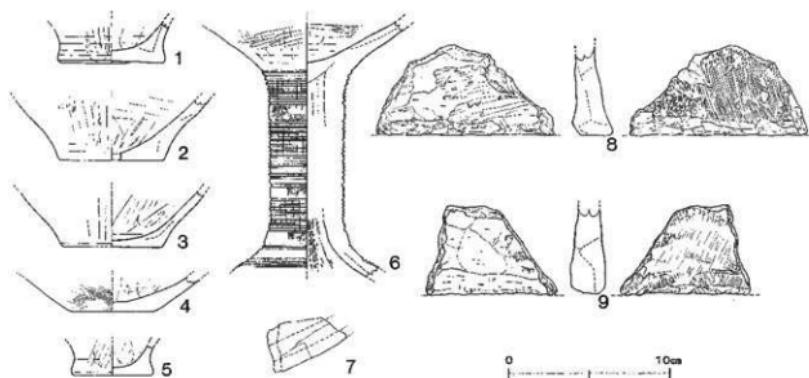
土師器 (G127・G128図)

G区遺構外からの土師器の出土量は多く、コンテナ1箱半程度出土している。しかし、小片が多いため実測に堪えるものは少なかった。

G127-1～G127-18には甕を取り上げた。いずれも口縁部が短く外反して開口するものであり、頸部以下にケズリ調整が施されるものが多い。しかし、時期については判然としない。G128-1・G128-2には高坏を示した。両者とも5世紀の所産と考えられる。G128-3～G128-5は坏と思われる。G128-3・G128-4は全面に赤色塗彩が施されていた痕跡が残り8世紀の所産と思われる。G128-6は小型の鉢である。手捏によって成形されており器壁は肉厚である。G128-7は蓋と思われる。中心に貫通する穿孔が認められる。G128-8・G128-9は土製支脚である。いずれも背面に穿孔が認められるが腹面には貫通しない。



G125図 G区遺構外出土弥生土器実測図1 (S=1/2)



G126図 G区遺構外出土弥生土器実測図2 (S=1/2)

須恵器・中世土師器 (G128図)

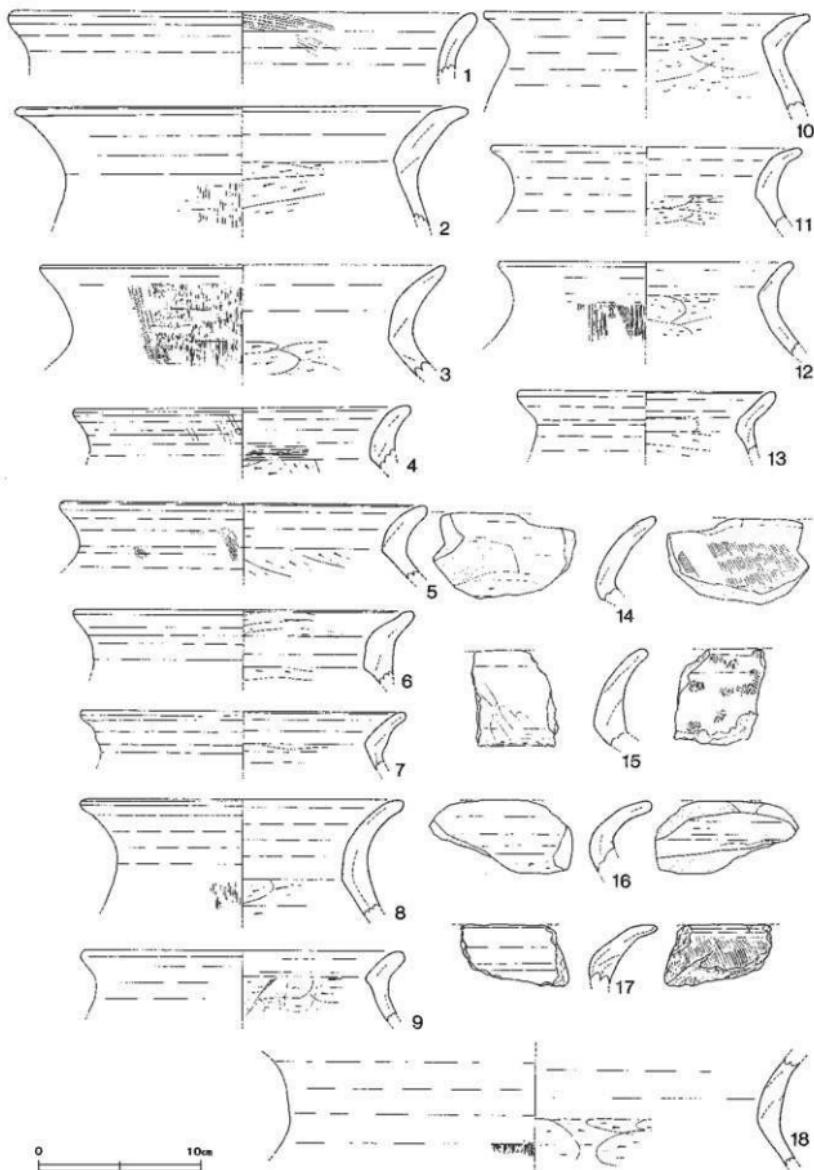
G区遺構外からの須恵器の出土量は少なく、ビニール袋1袋分に満たない。よって、実測に堪えるものはすべてG128-10～G128-12に掲載した。これらはいずれも高壺であり、脚柱部に切り込み状の透しが2方に認められることなどから、7世紀前半の所産と考えられる。

中世土師器も出土量は少なく、ビニール袋1袋分程度である。これらのうち実測可能なものはすべてG128-13～G128-17に示した。G128-13～G128-15は壺である。G128-13は約1/2残存しているものである。器壁は底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がっており、13世紀頃の所産と思われる。G128-14は器壁の立ち上がりの角度が場所によって変化しているため、いびつな形状を呈していたものと思われる。G128-15は底部をやや絞り、器壁は口縁部にかけて内湾して立ち上がり開口しているため、13世紀頃の所産と思われる。G128-16・G128-17には皿を示した。両者とも底部を絞っているが、前者は体部で器壁が内湾し、後者は外反している。前者は中世の所産と思われるが、後者は近世に時期が下がる可能性がある。

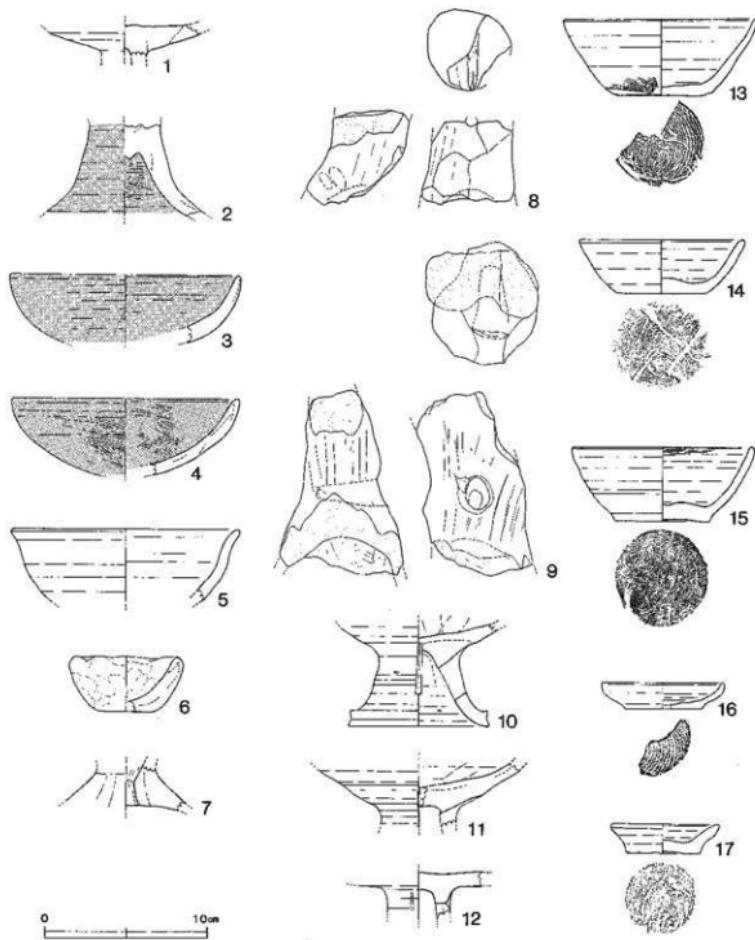
陶磁器・石製品 (G129・G130図)

陶磁器の出土は僅かであった。図示にあたっては主要と思われるもののみを取り上げている。

G129-1は瓦質の擂鉢と思われるが口縁部のみであるため詳細は不明である。G129-2は瓦質の底部片である。大型のものであり貼り付け突帯が認められる。G129-3は備前焼の壺であり口縁部が絞られている。G129-4は備前焼の大壺である。口縁部の器壁は外側に折り曲げられて開口している。G129-5は碗である。底部に高台が削り出され全面に灰白色の釉薬が施釉されている。G129-6は皿であり、見込み部に文字が染め付けられている。また、削り出し高台付近を除く全面に施釉されており、色調は明緑灰色を呈している。中国産で16世紀のものと思われる。G129-7も皿であり、底部の内外面に染め付けによる文様が認められる。また、全面に施釉されており色調は明青灰色を呈している。中国産で16世紀後半の所産であろう。G129-8は白磁である。高台を有しており器壁は体部で内湾するが、口縁部

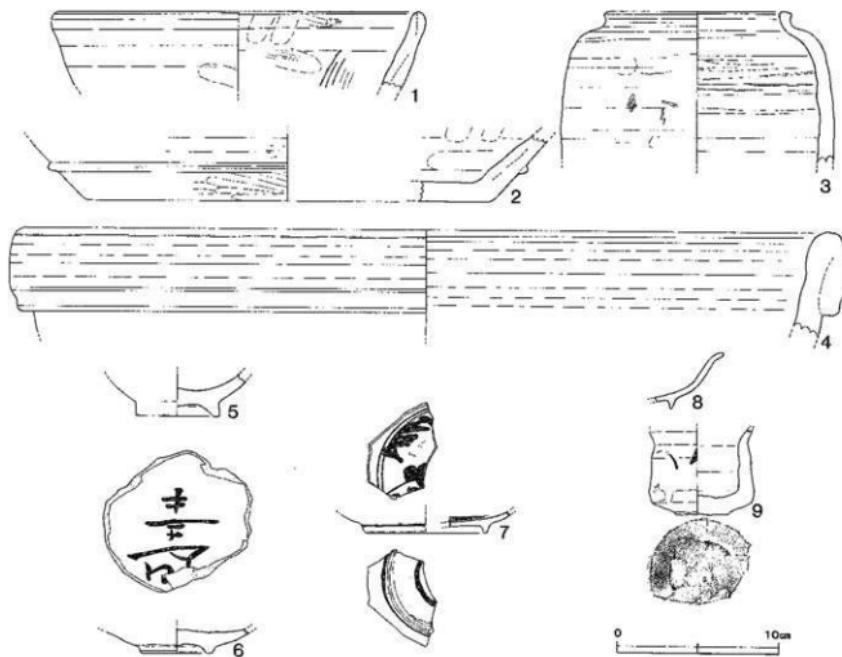


G127図 G区遺構外出土土師器実測図 (S=1/2)

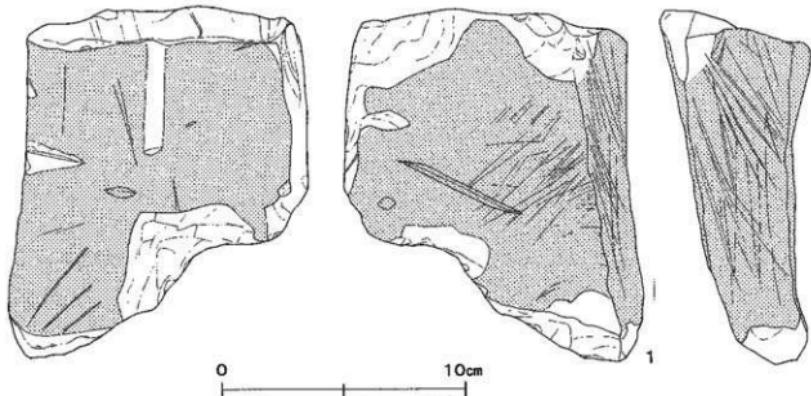
G128図 G区遺構外出土土器実測図 ($S=1\%$)

では外反して開口している。15世紀から17世紀の中国産と考えられる。G129-9は唐津焼の盃と思われる。体部から口縁部にかけての外面に釉薬が施されており、16世紀後半から17世紀前半の所産と考えられる。

G区の遺構外から出土した石製品は1点のみでありG130-1に示した。石英安山岩の砥石であり3面に研ぎ面を残している。これらの面には細い筋状の条溝のほか、幅3mmを測る鋭い切り込み状の条溝も認められる。



G129図 G区遺構外出土陶磁器実測図 ($S=1/2$)



G130図 G区遺構外出土石製品実測図 ($S=1/2$)

参考文献

- 山本 滉「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』1960
- 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書－和田所地造成工事に伴う発掘調査－』1984
- 宇野隆夫「10井戸考」「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』有限会社 真陽社 1989
- 松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会 1991
- 鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』1992
- 広江耕史「島根県における中世土器」「松江考古』第8集 松江考古学談話会 1992
- 松本岩雄・正岡睦夫「弥生土器の様式と縄年 山陽・山陰編」株式会社 木耳社 1992
- 大谷晃二「出雲地域の須恵器の縄年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
- 中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』有限会社 真陽社 1995
- 大田区立郷土博物館『トイレの考古学』東京美術 1997
- 伊藤 実「広島県における塙町式土器の研究の現状と課題」出雲の弥生検討会 第4回談話会資料 1998
- 広江耕史「出雲地域の中世土師器について」出雲平野の中世土師器検討会資料 1998
- 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会『古志本郷遺跡I 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』1999
- 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会『三田谷I 遺跡(V01.1) 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』1999
- 建設省中国地方建設局・島根県教育委員会『中原遺跡 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1999
- 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『歳小路西遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2』1999
- 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『姫原西遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告1』1999
- 斐川町教育委員会『荒神谷史跡公園整備に伴う尾田瀬II・西谷II・西谷遺跡発掘調査報告書』1999
- 広江耕史「陶磁器について」島根県埋蔵文化財調査センター専門研修資料 1999
- 間野大丞・平石 光「古代末～近世の土器」島根県埋蔵文化財調査センター専門研修資料 1999
- 勝部智明・松本岩雄・守岡正司「山陰地方分銅形土製品集成」「古代文化研究』第8号 島根県古代文化センター 2000
- 名和町教育委員会『茶畑山道遺跡 名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集』2000
- 松山智弘「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会 2000

第4章 考察

下古志遺跡の立地と環境

中村唯史（島根県立三瓶自然館）

はじめに

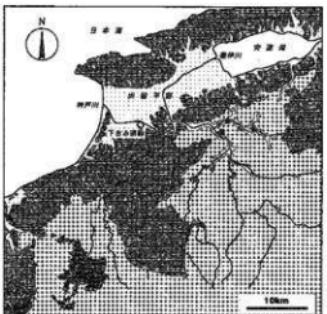
下古志遺跡は出雲平野の一角に位置している。出雲平野には数多くの遺跡の存在が知られていて、古代出雲の中心舞台とも言われる。

出雲平野の形成には縄文時代の火山イベントが関与していて、その特徴的な形成過程が弥生時代における集落の急速な発展を可能にした間接的な要因であったと思われる。

本章では、下古志遺跡と周辺の地質的特徴から、出雲平野の形成と古環境を述べる。

出雲平野の特徴

中国山地北縁の海岸に平行して、防波堤のような



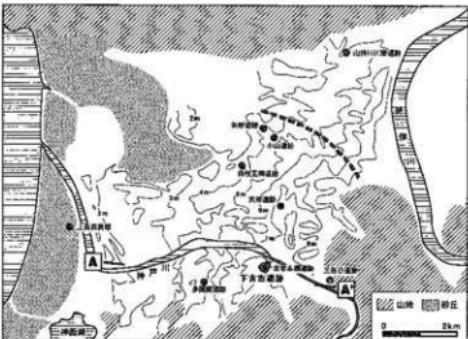
第3図 周辺地形と地質分布

形で島根半島が位置し、出雲平野はその内側に発達する沖積低地である。

沖積低地は完新世（1万年前以降）の沖積物によって沿岸部が埋め立てられて形成された地形で、出雲平野の地形は、おもに斐伊川と神戸川による河川堆積物で構成されている。

第4図に出雲平野（出雲市域）の地形図を示している。微地形の方向性をみると、図中に示した太波線付近を境にして、東側が斐伊川、西側が神戸川の三角州一扇状地地形に大別できる^{注1)}。2つの河川の違いは表層の堆積物にも現れる。斐伊川の堆積物は花崗岩質のいわゆる「マサ」で、神戸川の堆積物はデイサイト^{注2)}岩片を多く含むことを特徴とする。

出雲平野の遺跡は西側に偏った分布を示し、その多くは神戸川三角州地帯にある。下古志遺跡もそのひとつで、周辺は遺跡密集地となっている。



第4図 出雲平野西部の地形
(図中のA-A'は第6図の断面図位置を示す。)

平野形成までの環境変化

沖積低地の地形発達は、最終氷期以降の海面変化と密接な関わりがある。気候が寒冷化する氷期には、大陸上に氷床が発達し、海面低下が起こる。最終氷期でもっとも寒冷化した1.6~1.8万年前の日本列島周辺の海面は、現在より100m以上低くなっていた。最終氷期が終わった1万年前の海面は標高-30~-40m付近にあり、その後、6千年前頃までには現在のレベルまで上昇した。海面変化に伴う出雲平野付近の地形変化は次のようにであった。

氷期中は松江付近から流れ出る河川が西に流れ、谷を形成していた。この河川は斐伊川、神戸川と合流して、更に西へと流れていった。当時の谷地形は出雲平野の地下に埋没していることがボーリング調査で確認でき、深いところでは標高-40m以深に達する。

氷期が終わり、海面が上昇を始めたのに伴って海進現象（縄文海進）がおこり、谷は溺れて内湾が形成された。大社湾の方から入り込んだ内湾は、6千年前には松江付近まで広がる細長い湾になっていた。

6千年前頃に急速な海面上昇が終わると三角州が拡大するようになり、出雲平野の形成が始まった。

内湾の形成から平野拡大に至る過程は、平野の地下地質を見ることが出来る。第6図に下古志遺跡付近を通る東西方向の地下地質断面図²³⁾を示している。地表から10m前後の厚さで砂層が分布している。これは、神戸川の三角州堆積層である。その下に厚く泥層が分布している。この地層は、縄文海進によって形成された内湾の底に堆積した地層で、下部には6千3百年前に降灰した鬼界アカホヤ火山灰層が挟まれている。

神戸川の堆積物の特徴

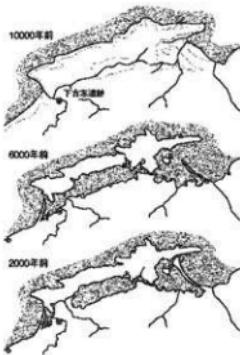
神戸川の堆積物はデイサイト岩片を多く含むことを特徴とする。このデイサイトは、神戸川の上流に位置する三瓶火山の噴出物に由来するものである。三瓶火山は縄文時代に2回以上の活動期があったことが明らかになっていて²⁴⁾、活動期には神戸川流域に多量の火碎流および土石流の堆積物をもたらしている。

下古志遺跡の地盤を構成する疊層～砂層は、デイサイト岩片が圧倒的に多く、同質の軽石礫も多く含まれる。この地層は斜交層理が発達した河川堆積層であり、火碎流や土石流の堆積層というわけではないが、一見すると、三瓶山山麓に分布する火山噴出物と粒子の円磨度以外では見分けがつかないほどで、火山噴出物の二次堆積層ということができる。

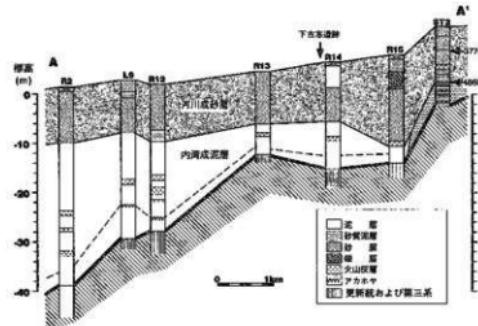
現在の神戸川の河床堆積物ではデイサイト岩片はそれほど多くなく、花崗岩など、その他の岩片が多く含まれる。また、下古志遺跡から北へ約2km離れた藤ヶ森遺跡のボーリングによると、デイサイト岩片が圧倒的に多く含まれるのは特定の層準だけで²⁵⁾、このような地層は火山活動時に形成されたと推定できる。

火山活動期のイベント

下古志遺跡から約2km上流（東）の神戸川右岸に位置する三田谷I遺跡では、島根県教育委員会による発掘調査で、



第5図 出雲平野周辺の古地理図



第6図 下古志遺跡付近の地下地質断面図
(ST2の右に付した数字は、¹⁴C年代値。)

2層の洪水堆積層の存在が確認されている。洪水堆積層はそれぞれ5m程度の層厚があり、弥生時代以降の遺構が立地する沖積段丘を構成している。

この洪水堆積層はディサイト質砂層および火山灰シルト層の互層からなり、三瓶火山噴出物の崩壊・流出によってもたらされたと判断できる。2層はその直下の¹⁴C年代値がそれぞれ得られていて、堆積時期が4700年前頃と3600年前頃の三瓶火山の活動期に対比できる¹⁴。すなわち、三瓶火山の活動に伴って、出雲平野まで多量の土砂をもたらすような洪水イベントがあったことを示しており、神戸川三角州の発達に影響を与えたことは確実である¹⁵。

下古志遺跡の地盤も、上記のように火山噴出物の二次堆積層からなっており、三田谷I遺跡と同様のイベントで形成されたと推定できる。地盤を形成する地層の堆積時期を示す資料は得られていないが、第6図に示している三田谷I遺跡の層序（第6図中のST2）と年代値との関係からみて、3600年前頃の火山活動が地盤形成に直接関与している可能性が高い。

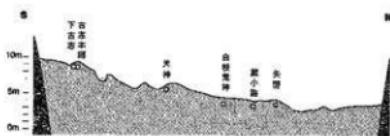
なお、火山活動によって洪水が引き起こされることは、1990年から3年間にわたった雲仙普賢岳の活動の際に水無川流域で幾度となく洪水（上石流）が発生したように、火碎流が生じる噴火に伴うイベントとしては一般的である。土砂状の火碎流堆積物は崩壊・流出しやすい。さらに、堆積物が谷を塞ぎ止めて湖が形成された時には、それが一気に決壊して大規模な洪水が発生することがある。

集落の形成

神戸川三角州からなる出雲平野西部の地盤形成に、縄文時代の火山イベントが影響を与えたことは、そこに立地する遺跡の古環境とも関わりがあると推定される。

下古志遺跡の遺構面は現地表のすぐ下にある。隣接する古志本郷遺跡や田畠遺跡も同様で、その他、天神遺跡や矢野遺跡など、出雲平野西部の微高地にある集落遺跡の多くは遺構面がごく

第7図 出雲平野西部の地形断面と遺跡立地
(白抜きの四角は弥生時代の遺構面の高さを示している。遺構面が現地表から浅い所にあり、当時の地形と現地形があまり変わらないことを意味している。)



深い。それは遺跡が営まれた時代以降の堆積量が少なかったということで、言い換えれば、遺構面を覆う堆積物をもたらすような河川の氾濫が少なかったということを意味し、これは集落の立地に有利な条件と言える。

地形的に最も明瞭な三田谷I遺跡では、火山活動期に形成された地盤（弥生時代の遺構面）は現川床との比高差が約5mの沖積段丘となっている。このことは、次のような河川作用の変化によると考えられる。

火山活動の神戸川は、洪水が多く土砂の運搬量が多い河川で、下流域では堆積が急速に進行した。しかし、火山活動が終わって土砂の供給量が減少すると、下流域でも場所によっては堆積作用より浸食作用が上回るようになり、扇状地の扇頂に近い部分や、自然堤防等の微高地が沖積段丘化した。

多くの河川では、時代が新しくなるほど山地の開発が進んで下流域での堆積量が増大する傾向があるのに対し、火山イベントで弥生時代以前に地盤の原形が完成された神戸川下流域は特殊なケースである。

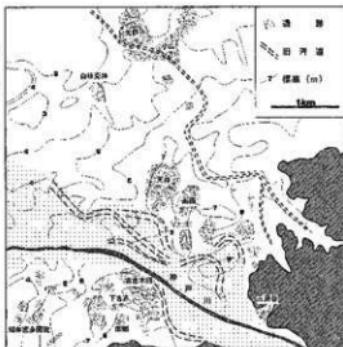
神戸川の旧河道

火山活動期の神戸川は大変な暴れ川で、洪水の度に流路が大きく変わるような流れ方をしていたと思われる。集落遺跡の多くが立地する微高地はこの段階で形成されており、遺構面の直下には河川堆積層の礫層～砂層が厚く分布している。神戸川の現河道から離れた矢野遺跡、小山遺跡でも同様である。

火山活動が終わると流路は安定していったと思われる。空中写真に認められる明瞭な旧河道と、遺跡の位置関係を第8図に示していく。蛇行して流れる旧河道が移動した範囲の両岸に遺跡が連続的に存在していることがわかる。遺跡が営まれた弥生時代以降の神戸川は、第8図に示した範囲を流れていたと考えるのが妥当であろう。

まとめ

下古志遺跡の地盤形成には3600年前の三瓶山の活動に伴う洪水イベントが関与していると考えられる。洪水イベントで形成された微高地は、その後の河川作用の影響を受けにくい場所となり、弥生時代の集落出現に有利な条件だったと推定される。そのことは、出雲平野西部の微高地に立地する集落遺跡に共通することである。



第8図 旧河道と遺跡分布

注

- 1) 斐伊川は神戸川扇状地の北を回り込んで西流していた時期がある。第4図ではその部分は省略している。
- 2) 火山岩の一種。石英安山岩ともいう。
- 3) 斐伊川放水路事業に伴って、建設省出雲工事事務所(当時)および鳥取県教育委員会によって行われたボーリングに基づいて作成。
- 4) 松井整司・井上多津男, 1971: 三瓶火山の噴出物と層序. 地球科学, 25, 147-163.
- 5) 中国郵政局・出雲市教育委員会, 1999: 出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「藤ヶ森南遺跡」
- 6) 建設省中国地方建設局・鳥取県教育委員会, 2000: 斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書「三田谷I遺跡」

下古志遺跡発掘調査に伴う花粉分析等調査

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

本報は県道多伎江南出雲線改良に伴う下古志遺跡発掘調査に伴い、出雲市教育委員会が川崎地質株式会社に委託して行った4次にわたる調査結果をまとめたものである。下古志遺跡は、出雲市西部の下古志町地内に広がる弥生時代以降近世に至る複合遺跡である。

下古志遺跡では、発掘調査区（A～G区）内の18地点（第9図）において分析用試料が採取されている。本報では、全調査区の全データをまとめ、下古志遺跡での地域花粉帯を設定した。さらにこれを基に下古志遺跡近辺から遺跡南～東方の丘陵、西方の砂丘地域の古環境を推定した。

試料について

図1に示した18地点で、試料を採取した。試料を採取した各地点のうち、統計処理に充分な量の花粉化石、あるいは珪藻化石が検出できた15地点の模式柱状図を第10～34図の各種ダイアグラム中左側に示す。また、模式柱状図右の数字が試料番号で、採取層準に示してある。

分析方法

花粉、珪藻各分析処理は渡辺（1995a, b）にしたがっている。

全ての分析の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行われた。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行われた。珪藻分析では原則的に珪藻総数が200個体以上になるまで同定が行われた。ただし、花粉、珪藻分析でそれぞれの含有量が少ない場合には、木本花粉総数、珪藻総数が200個体に達していない。

分析結果

分析結果を第10～22図の花粉ダイアグラム、第23～34図の珪藻ダイアグラム、珪藻総合ダイアグラムに示す。

花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。また検出数の極めて少ない試料では（検出数が少なくても得られたデータが他地点と整合性がある場合には、ダイアグラムにスペクトルで示している）、出現した種類を「*」で示した。

珪藻ダイアグラムでは検出総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、スペクトルで示している。また検出数の少ない試料では、出現した種類を「*」で示した。

珪藻総合ダイアグラムのうち左端の「生息域別グラフ」は、同定した全ての種類を対象に、それぞれの要因（生息域）毎に百分率で示したものである。その他の4つのグラフは、淡水種の珪藻についてそれぞれの要因毎に百分率で示したものである。

花粉化石の含有量の少ない原因について

下古志遺跡内の多くの試料（層準）で、花粉化石の含有量が少なかった。この原因について、通常は以下のよう事が考えられている。

1. 堆積速度が早いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
2. 花粉化石の平均的な粒径（数～100μ）と堆積物の粒度が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。
3. 土壌生成作用にともなう堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
4. 花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
5. 有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかった。

今回の多くの試料では、炭片が多く含まれていた（試料観察で試料が有機質に富んでいたのは、このことに起因すると考えられる）。また、古土壤中で高率になることが多い胞子化石も相対的に多い試料があった。

以上のような試料の状況より、今回、花粉化石の含有量が少なかった原因には、上記の1～3による可能性がある。

地域花粉帯の設定

A～Gの各調査区の内、B区の調査結果が最も良好であった。このことから、B区での地域花粉帯を元に地域花粉帯を設定した。第10～24図の花粉ダイアグラムに花粉帯を示す。また、第5表に各調査区での花粉帯の状況を示す。最上部のI帶a亜帯は各調査区で存在するはずであるが、分析を省略したために確認できない調査区があった。

以下に各花粉帯の特徴を示す。本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

(1) I帶 (B区SD27⑦、⑥、D区大溝西④、E区SD13⑩)

マツ属（複雑管東亜属）が卓越し、スギ属、アカガシ亜属を伴う。草本花粉の出現傾向からb（B区SD27⑦）、a亜帯（B区SD27⑥、D区大溝西④、E区SD13⑩）に細分した。

b亜帯は木本花粉と草本花粉の割合が何程度である。

a亜帯は木本花粉に比べ、草本花粉が圧倒的な高率を示す。

(2) II帯 (B区SD27⑤、E区SD07⑧～①、SD13⑥～④、F区SD01⑧)

アカガシ亜属が卓越し、マツ属（複雑管東亜属）、スギ属、コナラ亜属を伴う。

(3) I帶 (A区SD28⑥～①、SD01②、B区SD27②、①、SD49④～①、C区SE01③、②、D区SD05②、①、大溝西①、E区SD13③～①、SD17②、G区SI01①、SD01①)

マツ属（複雑管東亜属）が卓越し、スギ属を伴う。

イネ科（40ミクロン以上）、アブラナ科花粉などの草本花粉の組成変化と、推定堆積時期の関係から、I帶をさらにb（A区SD28⑥～③、SD01②、B区SD27②、①、SD49④～②、E区SD17②、G区SD01①）、a亜帯（A区SD28②、①、B区SD49①、C区SE01③、②、D区SD05②、①、大溝西①、E区SD13③～①、G区SI01①）に細分した。

b亜帯は古代～近世以降の堆積層であり、イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で出現し、ソバ属やワタ属が僅かであるが出現する。

a帯は現代耕作土あるいは直下の層であり、イネ科（40ミクロン以上）花粉および、アブラナ科花粉が高率で出現する。

珪藻帶（化石群集）の設定

調査地区を横切る6条の溝の堆積環境を推定するために実施した珪藻分析の結果、各地点で共通した化石群集が認められた。

以下に、それぞれの特徴を示す。本文中では珪藻組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料№も下位から上位に向かって記した。

(1) D-I帯 (D区SD05②～⑥、大溝東⑦～④、E区SD04⑧、⑦、SD07⑧、⑦、SD13②、⑪、SD17⑤、④)

これも弥生時代から古墳時代にかけての「溝」の埋土の分析結果である。*Achanthes brevipes*などの海水あるいは汽水種が僅かに検出される (D区大溝東では、50%を越える高率になる) が、ほとんど淡水種からなる。淡水種では*Cymbella*属、*Epithemia*属、*Eunotia*属、*Pinnularia*属などの底生種がほとんどを占める。

(2) D-II帯 (E区SD13⑨、⑧)

底生種がほとんどを占める。底生種の内、*Eunotia*属、*Pinnularia*属などの酸性種が増加する。

(3) D-III帯 (E区SD13⑦)

陸生種の*Mellosira roesiana*が高率になり、底生種の割合がやや低くなる。

(4) D-IV帯 (E区SD13⑥)

底生種がほとんどを占める。底生種の内、*Eunotia*属、*Pinnularia*属などの酸性種が増加する。

(5) D-V帯 (E区SD13⑤～③)

陸生・酸性種の*Eunotia praerupia*が卓越するほか、底生・酸性種の*Eunotia pectinalis* var. *undulata*も高率を示す。

(6) D-VI帯 (E区SD13②、①)

陸生・アルカリ種の*Hantzschia amphioxys*、陸生・不定種の*Pinnularia borealis*が高率を示す。それらは低率であるが、多くの底生種が出現し、底生、陸生がそれぞれ50%弱の割合となる。

古植生の推定

花粉帶ごとに、下古志遺跡近辺から周辺地域での古植生を推定する。

(1) III帯期（弥生時代中期～古墳時代初頭頃？）

1) 既知の結果との比較

B、D、E区において分布が確認できた。これも溝の堆積物として得られたものである。

マツ属（複雑管束亞属）花粉が卓越し、スギ属、アカガシ属花粉を伴う。鳥根県宍道湖周辺地域における分析では、この時期にマツ属（複雑管束亞属）花粉が卓越する報告はなかった（例えば大西、1993）。一方、近年の出雲市内での花粉分析結果（例えば藤ヶ森南遺跡）では、今回の分析結果同様にマツ属（複雑管束亞属）花粉が卓越する傾向にある（渡辺、1999）。

2) 周辺地域の植生1.（マツ属（複雑管束亞属）花粉の給源について）

マツ属（複雑管束亞属）花粉の給源について現状では2通りの説が有力である。一つは、遺跡の南～東方に広がる中国山地縁辺の丘陵にアカマツを要素とする二次林が分布しており、ここからも

たらされたという説である。この「二次林化」説に従えば、人間活動の側面から捉えることも可能であろう。もう一つは、「出雲国風土記」に記載される「闇の松原」が遺跡西方に存在し、ここでのクロマツ海岸林からもたらされたという説である。現状では何れの説も甲乙付けがたく、結論は導き出せない状態である。今後のデータ蓄積を待つしか、方法は無い。

3) 周辺地域の植生2. (その他の木本花粉の給源について)

スギ属、アカガシ亜属花粉もやや高率で出現することから、丘陵部でも人間活動の影響の少ない地域や、中国山地奥地にはカシ類を要素とする照葉樹林の分布が推定される。また三田谷遺跡の分析結果から指摘された（渡辺、2000a, b）ように、谷沿いの低地にはスギ林が分布していたと考えられる。

4) 溝周辺の植生

花粉帯域のa、b亜帯は溝の埋積過程にともなう植生の変化を示すと考えられ、厳密には花粉帯の定義（同時間）に当てはまらない。後述のように、溝が埋まり始めた頃は溝内に水の流れがあり、溝内部は植生に乏しい状況であったと考えられる（b亜帯）。一方、溝の周り（土手？）にはキク科の「雑草」が茂っていたと考えられる。溝が埋まるに従い水位が低くなり、溝内にイネ科やカヤツリグサ科の湿性植物が成育を始めたと考えられる（a亜帯）。

B区ではソバ属花粉やイネ科（40ミクロン以上）が特徴的に出現することから、溝の近くでイネやソバが栽培されていたと考えられる。

5) 溝の堆積環境

珪藻帯では、D-I～Ⅲ帯がこの時期に相当する。D-I帯では底生・アルカリ種が卓越することから、何れの溝も埋まる初期には弱い流れがあるものの、比較的停滞した状況で水が貯まっていたと考えられる。また出現した海～汽水種の珪藻は、背後の丘陵に分布する「第三紀層」からの二次堆積である可能性が高い。E区SD13地点のSD15ではD-II帯で酸性種が増加し、さらにD-Ⅲ帯で陸生種が増加することから、溝が埋まるにしたがい水位が低くなり、水の流れも無くなつたと考えられる。

(2) II帯期（弥生時代中期～奈良・平安時代）

1) 既知の結果との比較

前帶に比べマツ属（複維管束亞属）花粉が低率に、スギ属、アカガシ亜属花粉が高率になる。同様の傾向は、前述の藤ヶ森南遺跡や三田谷遺跡でも認められる。また下位からの変化は明らかでないが、Ⅱ帯に相当する花粉組成は出雲平野中央部の高岡遺跡でも認められる（渡辺、2000c）。

2) 周辺地域の植生

アカマツ二次林が極相林へと遷移し、遺跡南～東方に広がる丘陵部では、カシ類を要素とする照葉樹林の分布域が拡大したと考えられる。また、多くの溝が埋まった時期と重なることから、遺跡周辺の環境が大きく変化したと考えられ、人間活動と関連する可能性も指摘できる。

E区SD13地点SD13溝内の結果では、スギ属花粉が検出されずモクセイ科花粉が高率になる（E区SD13地点④）など、遺跡内あるいは周辺地域とも異なる花粉組成を示している。したがって、溝近辺の植生を反映している可能性が高い。

3) 溝周辺の植生

溝底部の分析結果では、Ⅲ帶での溝底部の結果（b亜帯）同様にキク科（ヨモギ属、タンボボ亜科を含む）花粉が卓越し、カヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）花粉が少ない傾向にある。上部の分析結果（B区SD49⑤）はⅢ帶での上部（a亜帯）同様にカヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）花粉が高率を示している。

前述のように、溝が埋まり始めた頃は溝内に水の流れがあり、溝内部は植生に乏しい状況であり、溝の周り（土手？）にはキク科の「雑草」が茂っていたと考えられる。溝が埋まるに従い水位が低くなり、溝内にイネ科やカヤツリグサ科の湿性植物が成育を始めたと考えられる。前述のE区SD13地点④で認められるモクセイ科花粉は、湿地状になった溝内部に成育したシオジ、あるいはヤマトアオダモに由来する可能性があるほか、畦に植えられることのあるトネリコに由来する可能性もある。

B区SD49では、Ⅲ帶から引き続きソバ属、イネ科（40ミクロン以上）花粉が特徴的に出現し、溝の近くでイネやソバが栽培されていたと考えられる。

4) 溝（E区SD13地点SD14, SD13）の堆積環境

SD14は底部のみ堆積物が残存している。D-IV带に対応し、底生・酸性種が卓越する傾向にある。このことから、埋まる初期には流れのほとんど無い疊んだ水溜まり状の水路であったと考えられる。SD13は底部および上部共にD-V带に対応し陸生・酸性種が卓越することから、水の流れもほとんど無い、水深のごく浅い湿地状態で堆積したと考えられる。

（3）I帶期（平安・奈良～現代）

1) 既知の結果との比較

I帶期に該当する時期は、古代以降現代までと長い期間である。前述の藤ヶ森南遺跡、高岡遺跡、三田谷I遺跡などでは、今回の下古志遺跡に比べ堆積物が厚く、堆積時期の細分が行われている。古代以降の時期としているが、マツ属（複雑管束亜属）の卓越など、他地点との比較では中世末から近世以降の植生を反映している可能性が高い。

2) 周辺地域の植生

木本花粉組成では前帯から一転してマツ属（複雑管束亜属）が卓越し、森林植生としてアカマツ二次林が広がったと考えられる。遺跡周囲に水田が広がっていたと考えられることから、アカマツ林はⅢ帶同様に遺跡南～東方に広がる丘陵から中国山地縁辺部にかけて分布していたと考えられる。また、西方の「團の松原」や、浜山丘陵にはクロマツ海岸林、島根半島にはアカマツ二次林が分布していた可能性が高い。

木本花粉の内やや高率を示すスギ属は、この時期には平野部周辺に分布する木は人間活動により有用材として伐採されていたと考えられ、中国山地の山間低地に成育していたと考えられる。しかし、出現率が高いことから遺跡南～東方に広がる丘陵部の谷筋に分布していた可能性もある。

3) 遺跡近辺の植生

前帯までの堆積物と異なり、ほぼ水平に堆積する層から得られている。また、耕作土層と考えられている地点もある。

草本花粉の割合が高く、特にイネ科（40ミクロン以上）が高い出現率を示すことから、遺跡内には水田が広がっていたと考えられる。

ソバ属花粉は下位から連続してb亜帯でも検出され、a亜帯ではほとんど検出できなくなる。したがって、ソバは弥生時代中期（Ⅲ帯期）以降、I帯b亜帯期頃まで栽培されていたことが分かる。また、A区SD28ではワタ属花粉がb亜帯でのみ検出される。ワタがI帯b亜帯期には栽培されていたことも明らかである。

a亜帯になるとアブラナ科の花粉が高率になり、ナタネの栽培が行われていたことが示唆される。アブラナ科の花粉は花粉形態からの細分が困難であり、ナタネと断定することはできない。しかし、イネ科（40ミクロン以上）を伴い高率で出現することから、藤田ほか（1991）に準じてナタネに由来すると考えた。また、ナタネは慶長・元和（1596～1623）頃から栽培されたとされており（末永1988）、a亜帯はこれ以降の時期を示している可能性がある。

4) 濃（E区SD13地点（SD11）の堆積環境

底部はD-V帯に対応し陸生・酸性種が多いことから、水深のごく浅い湿地状の環境が推定される。上部はD-VI帯に対応し、底部（D-V帯）に比べアルカリ種の増加、酸性種の減少が認められる。水の流れが僅かに認められるようになったと考えられる。

まとめ

下古志遺跡において実施した花粉分析結果から、以下のことを考察した。

(1)分析調査を行った多くの試料で、花粉化石の含有量が少なかった。この原因として以下のことが考えられた。

- ①堆積速度が速く、花粉化石が含まれなかった。
- ②堆積粒子のサイズが粗く花粉化石粒子が含まれにくかった
- ③土壤化により花粉化石が消滅した

(2)十分な量の花粉化石が得られた試料について、I～Ⅲ帯の地域花粉帯を設定した。また、I、Ⅲ帯はそれぞれa、b亜帯に細分できた。

(3)弥生時代中期以降の古植生変遷が明らかになった。これらのうち、特筆すべき点は以下のことである。

- ①遺跡近辺で広く水田耕作が行われたのは奈良・平安時代（I帯期）以降である。ただし、それ以前（Ⅱ、Ⅲ帯期）でも水田耕作が行われていた可能性はある。一方、ソバ栽培はⅡ、Ⅲ帯期にも、B区を中心に行われたと考えられる。
- ②Ⅱ、Ⅲ帯期でのマツ属（複雑管束亜属）の高率出現は、アカマツ二次林、クロマツ海岸林の分布地域、人間活動との関連など、今後の分析調査において注意を要する課題である。
- ③I帯a亜帯期で高率になるアブラナ科は、ナタネに由来すると考えられ、江戸時代以降遺跡周辺で栽培されていたことがわかる。

引用文献

- 藤田憲司・古谷正和・渡辺正巳 (1991) 大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について、日本文化財科学会第8回大会研究発表会要旨、33-34。
- 大西徳夫 (1993) 中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分布と植生変化、地質学論集、39、33-39。
- 末永雅雄・井上 薫・山口之夫・上田宏範・福島雅藏・田中久夫・勝部明生・泉森 皎・持田兼典・千賀 久 (1988) 大阪狭山市史要、大阪狭山市役所、P 404、大阪。
- 渡辺正巳 (1995a) 花粉分析法、考古資料分析法、84、85、ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳 (1995b) 硅藻分析法、考古資料分析法、86、87、ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳 (1999) 藤ヶ森遺跡の花粉、プラント・オパール分析、藤ヶ森南遺跡-出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一、31-37。
- 渡辺正巳 (2000a) 三田谷I遺跡'94E区・'95F区発掘調査に係る花粉分析、斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ-三田谷I遺跡 (Vol.3)、117-122、建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会。
- 渡辺正巳 (2000b) 三田谷I遺跡c区発掘調査に係る花粉分析、三田谷I遺跡-塙治299号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一、65-70、出雲市教育委員会。
- 渡辺正巳 (2000c) 高岡遺跡における花粉およびプラント・オパール分析、高岡遺跡-出雲ジュンテンドード地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一、33-39、出雲市教育委員会。

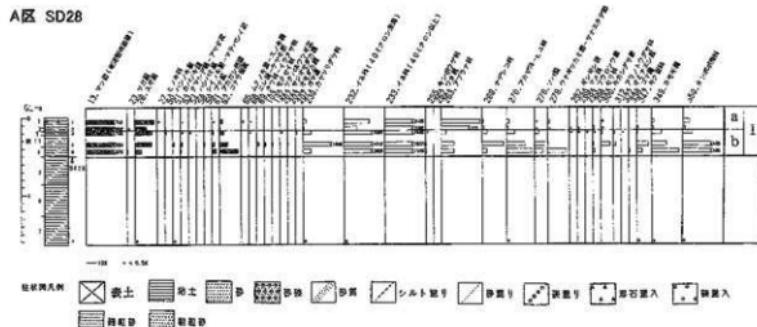
A区		B区		C区		D区		E区		F区		G区		特徴	
花粉带	堆积时期	花粉带	堆积时期	花粉带	堆积时期	花粉带	堆积时期	花粉带	堆积时期	花粉带	堆积时期	花粉带	堆积时期	花粉带	堆积时期
I	现代	a 近世以前	b 中世	I 平安奈良	a 平安奈良	I 平安奈良	a 平安奈良	I 平安奈良	I 平安奈良	I 平安奈良	I 平安奈良	I 平安奈良	I 平安奈良	Cruci. >Crypto.	Gras(>40)
	近世以前														
	b 中世	b 中世	b 平安奈良	II 古墳初期	b 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	b 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	Diplo. >Crypto.	Gras(>40)
	平安奈良														
		II 古墳初期	a 弥生末	II 古墳初期～弥生末	a 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	a 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	II 古墳初期～弥生末	Cyclo.>Diplo. Crypto., Quer.	Grass
		III 弥生末	b 弥生末	III 弥生末	b 弥生末	III 弥生末	b 弥生末	III 弥生末	III 弥生末	III 弥生末	III 弥生末	III 弥生末	Diplo. >Crypto.	Grass	

第5表 各調査区と花粉帶

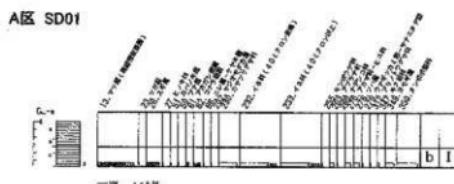
Diplo.:マツ属(復総管束亜属)、Crypto.:スギ属、Cyclo.:アカガシ亜属、Quer.:コナラ亜属
 Cruci.:アブラナ科、Gra (>40):イネ科(40ミクロン以上)、Grass:草本



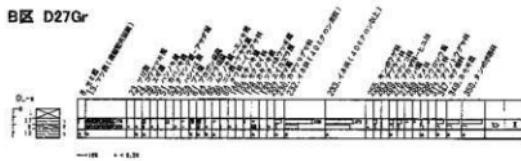
第9図 試料採取地点の配置



第10図 A区SD28の花粉ダイアグラム



第11図 A区SD01の花粉ダイアグラム



第12図 B区D27Grの花粉ダイアグラム

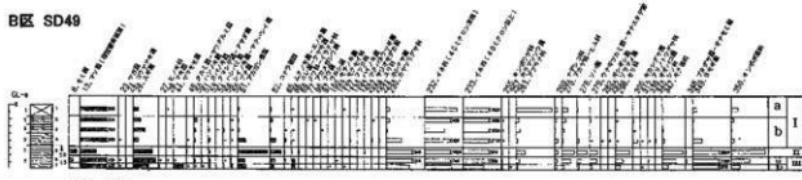
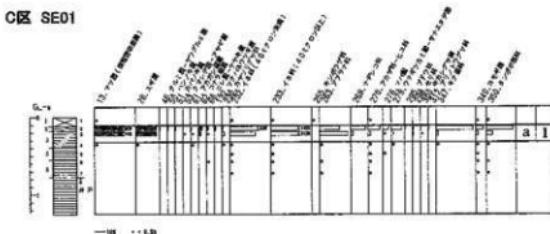
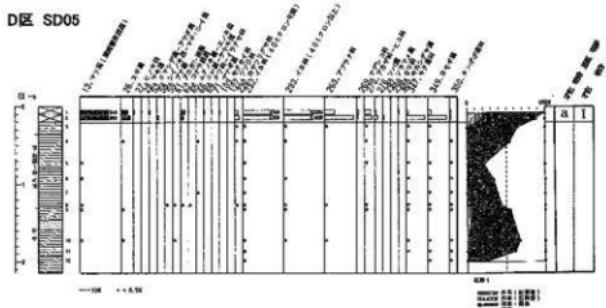


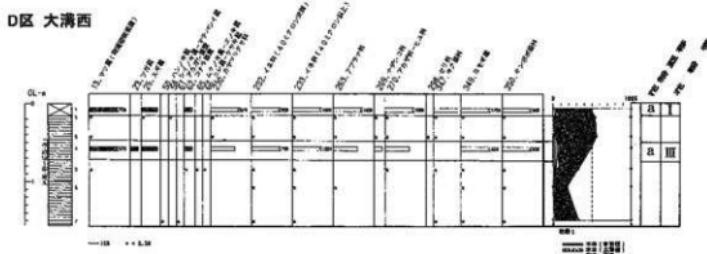
図13 B区SD49の花粉ダイアグラム



第14図 C区SE01の花粉ダイアグラム

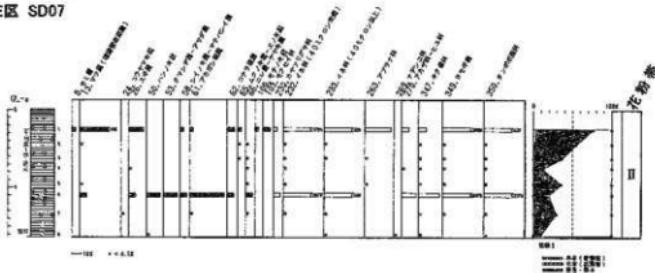


第15図 D区SD05の花粉ダイアグラム



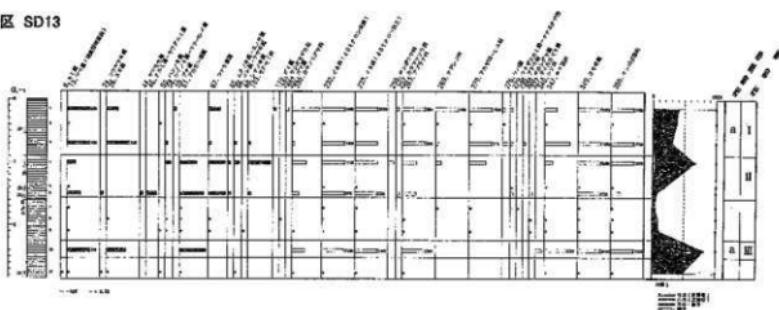
第16図 D区大溝西の花粉ダイアグラム

E区 SD07



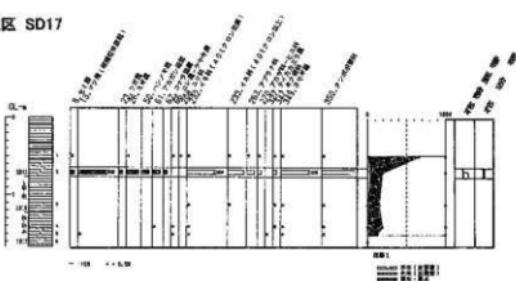
第17図 E区SD07の花粉ダイアグラム

E区 SD13



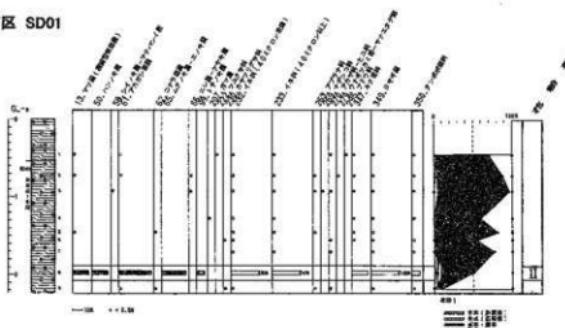
第18図 E区SD13の花粉ダイアグラム

E区 SD17



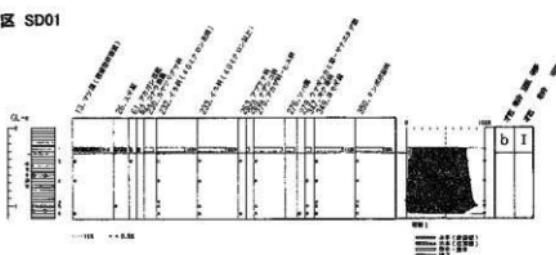
第19図 E区SD17の花粉ダイアグラム

F区 SD01



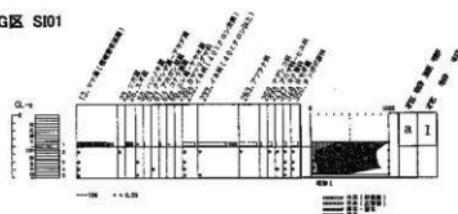
第20図 F区SD01の花粉ダイアグラム

G区 SD01



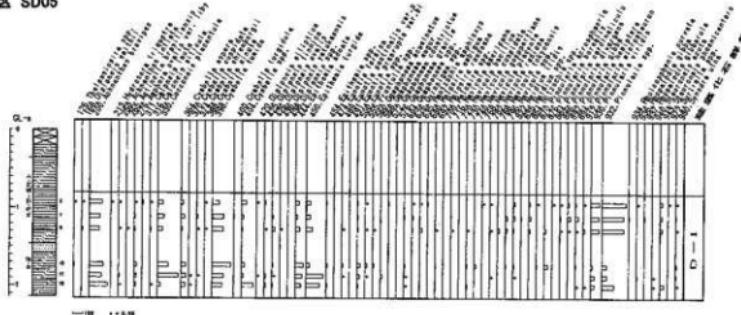
第21図 G区SD01の花粉ダイアグラム

G区 SI01



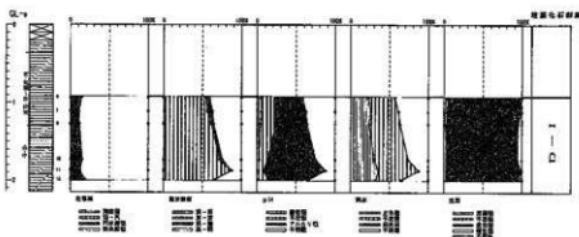
第22図 G区SI01の花粉ダイアグラム

D区 SD05



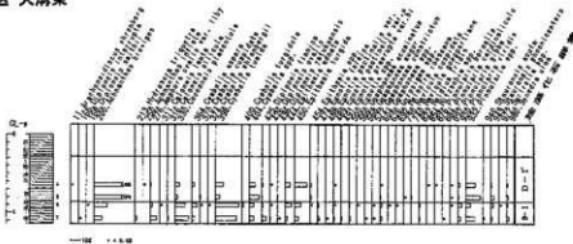
第23図 D区SD05の珪藻ダイアグラム

D区SD05



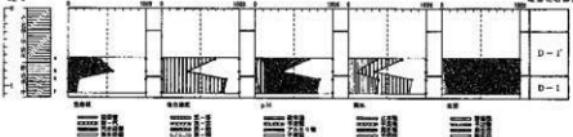
第24図 D区SD05の珪藻総合ダイアグラム

D区 大溝東



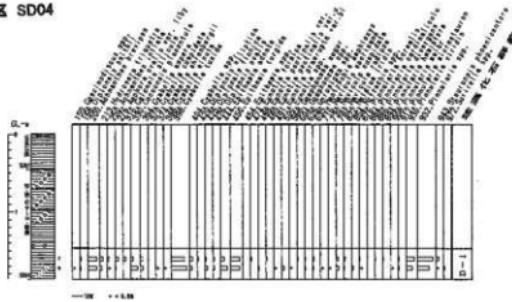
第25図 D区大溝東の珪藻ダイアグラム

D区 大溝東



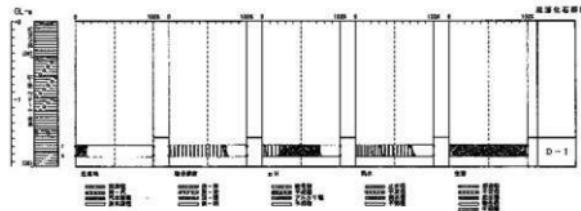
第26図 D区大溝東の珪藻総合ダイアグラム

E区 SD04



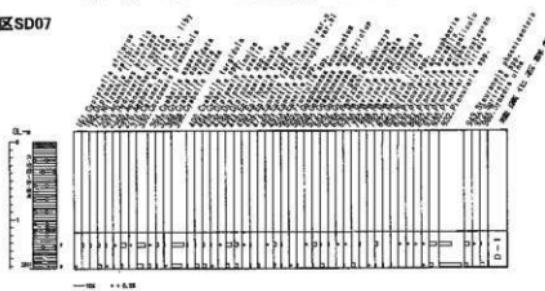
第27図 E区SD04の珪藻ダイアグラム

E区 SD04



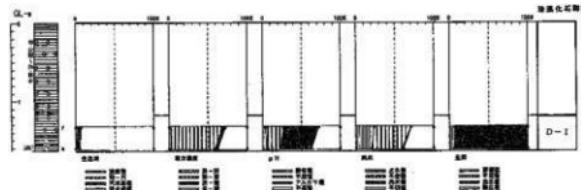
第28図 E区SD04の珪藻総合ダイアグラム

E区SD07

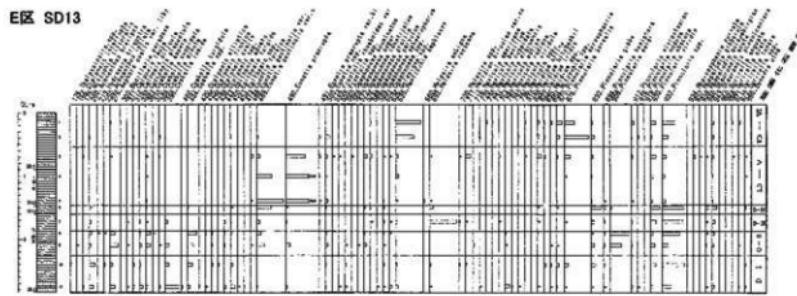


第29図 E区SD07の珪藻ダイアグラム

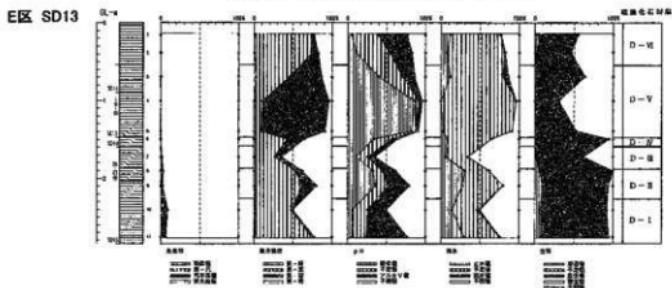
E区 SD07



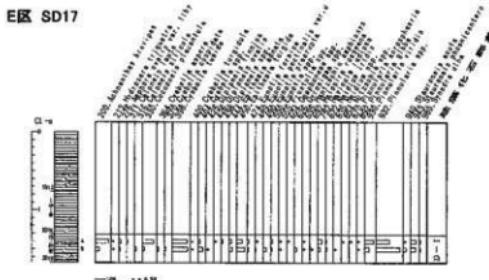
第30図 E区SD07の珪藻総合ダイアグラム



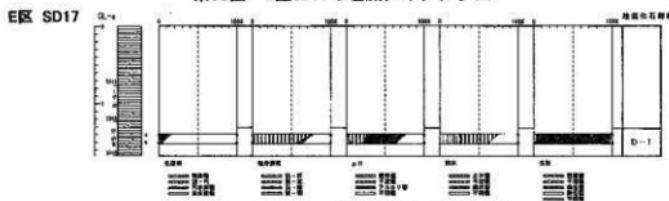
第31図 E区SD13の珪藻ダイアグラム



第32図 E区SD13の珪藻総合ダイアグラム



第33図 E区SD17の珪藻ダイアグラム



第34図 E区SD17の珪藻総合ダイアグラム

報告書抄録

ふりがな	しもごしいせき
書名	下古志遺跡
副書名	一般県道多伎江南山雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編集者名	米田美江子、三原一将
編集機関	出雲市教育委員会
所在地	〒693-8531 島根県出雲市今市町109番地1 TEL 0853-23-3636
発行年月日	西暦2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもごしいせき 下古志遺跡	しまねけん いせき 出雲市 しゆにしちょう 下古志町、 こじまち 古志町	32203	N06-N08 <small>(出雲市遺跡地図)</small>	35度 20分 20秒 3 30秒	132度 44分 20秒 3 30秒	199504 199802	9,120m ²	一般県道 多伎江南 出雲線改 良工事
所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
下古志遺跡	集落跡	弥生時代 中世	環濠 堅穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸跡 土坑 柱穴	弥生土器 土師器 須恵器 中世土師器 陶磁器	弥生時代の環濠と考えられる大溝が検出された。			

一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

下古志遺跡

一本編一

平成13年(2001)3月

編集・発行 出雲市教育委員会
出雲市今市町109番地1

印刷・製本 ナガサコ印刷
出雲市下横町350